

川 柳 雅 証

麻生路郎\*主幸



Pencoj flugas trans la laud-limon

The Senryu Zasshi

No.346

三月號

昭和十一年三月一日發行第一號 第三號  
 一千九百二十三年正月三十一日  
 三月四十六日



## 三 月 号 目 次

窓 口 談 義……………米田三男之介	題 字……………麻生路郎
いやしんぼ……………堀口 塊人(三)	表 紙……………麻生路郎(三)
幸福を幸福に……………戸田 古方(六)	
吉形苑女さん……………丸尾 潮花(三)	
を訪ねて……………麻生 路郎(四)	
新川柳鑑賞……………麻生 路郎(四)	
文字の遊戯と……………池沢白翁居(六)	
駄洒落漫談……………長野 文庫(六)	
当世あべこべ集……………東野 大八(二)	
親子の旅……………八木摩太郎(三七)	
と酒屋……………酒井ひか平(三七)	
御 緑……………富士野鞍馬(三四)	
源 頼 政……………山本 葉光(二〇)	
歌会始と川柳……………藤村梨花記(一四)	
川雑婦人友……………沖野岩三郎氏を	
の会の集い……………悼	
社 の 黒 板……………	
不朽洞句帖……………麻生 路郎(三)	
川 柳 塔……………麻生路郎選(六)	
同 舟 近 詠……………諸 家(二七)	
近 作 柳 樽……………麻生路郎選	
一路集「告白」……………北川春葉選(一六)	
「配達」……………市場没食子選(三三)	
金 泥 集……………若木多久志選(三六)	
各地 柳 壇……………麻生曹乃選(二九)	
川柳第二教室……………	
不朽洞会から……………戸田古方(一四)	
柳 界 展 望……………(三四)	
公私雑記……………(三五)	

## 本 社 三 月 句 會

注意  
本社の句會は毎月七日  
を定例日といたします

兼 題 「雑 沓」(三句) 麻 生 路 郎 選  
「国 産」(三句) 戸 田 古 方 選  
「宿 直」(三句) 富 岡 淡 舟 選  
三 題 (当日発表)

席 題 三 題 (当日発表)

柳 話 麻 生 路 郎

句 評 清 水 白 柳 子

呈 賞 ★各題天位 ★路郎選天位に不朽洞賞

会 費 五 拾 円

幹 事 紫香・淡舟・賀峯・いさむ・凡九郎・  
白水・雄声・水堂・愛論

日 時 三月七日(水)午後六時

場 所 光 明 寺

大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前  
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

よほど春めいて来ました春宵の一刻を川柳のダイ  
ゴ味に浸ることは私たち川柳人の大きな欣びです。  
柳友を誘い合して是非御参加下さい。

川柳雜誌社句會部

学生教養新書 全五十巻  
日本図書館協会選定図書

麻生路郎著  
川柳とは何か 川柳の作り方  
と味い方

二五〇円 送三三三円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。その川柳  
がいかにして發生し、経過し、今日に至り、将来に動  
くか、及びその作り方と味い方を柳壇の第一人者が五  
十余年間の実作者としての尊い經驗を生かして最も平  
易にわかり易く説かれた斯道最適の案内書。

取 次 川 柳 雜 誌 社

至 文 堂  
東京都新宿区払方町



## 窓口談義

近ごろの新聞を見ていると片カナが非常に殖えた。何も片カナにしないでよいものまで片カナにしているのがある。私が片カナというのは外語の意であるが、そこへ、サバとか、アジとか、マグロだとかいうような漢字で読み悪い字を片カナで表わしたのと、ガツカリとか、チャツチャツチャッだとか、パチンコだとかいうような語が入り交じっているのだからまことに厄介だ。

朝日なんか見ていると短い記事の中に外語が十数語あって、その

中には、ちよつとや、そつとの語学力では意味のハッキリしない語が一つや二つはある。意味のモ一つハッキリしない語を一々辞典と首ッ引で読む訳にも行かない。記事を書く記者は大学出で日常使い馴れた単語かも知れないが、読者がすべて大学出というわけではないから、誰でも読める新聞を作る心がけが必要だと思いがどんなものであろう。

漢字では読み悪いから、アジとかサバとかいう式に片カナで書くのだとすれば、外語も極く普遍的なものとは別として日本語で表わせる場合にはなるべく日本語で表わす方がいいと思う。大学出に、魚へんの字を沢山ならべて読ましたらおそらく、満点をとる人はないだろう。それと同じで新聞の記事の中にある外語の意味を一々聞かれて、満足に答えられる読者が幾人いるだろう。

外語でなければ云い表わせないものはやむを得ないが、ものによればカッコをして、その中で簡単な説明をしておく親切さが必要である。時にはそんなものも見かけるが、そう／＼いつも説明をすることは面倒でもあり、不可能でもあるから結局は出来るかぎり日本語で表わし、それも意味の解りよいものを選んで用いる習慣をつくることである。

そうすれば、新聞はまだ／＼普及する余地が充分あると思う。ヘンなお添物で競争するよりも、誰でも読める新聞をつくることである。その昔、私がある代議士の顧問をしていた時に、弔詞をたのまれたことがある。その代議士の選挙区内の学童が亡くなったのであったが、渣屑として逝く嗚呼式でなく、口語調で声涙共にくだるような弔詞を書いたところ、それは落第で、矢張り霊あらば来たり享けよ式に書き直されたことがある。それでないと代議士としての重量感が出ないと考えたこと、

この代議士が中学しか出ていないので、安っぽく思われるという考え方が多分にあったように思う。ところが、その告別式で学童代表の口語調の真に迫った弔詞があらゆる名譽職のそれを乗り越えて会衆の涙を絞ほらせたのであった。この点から考えても、誠意でものを書くことと、その表現の方法は誰にでも判り易くするということが必要だと思ふ。

無闇な外語を用いないことと、むずかしい漢字を用いないことは川柳に於ても云えることであるが川柳では感じの強弱の關係から多少むずかしい漢字であってもそれが適正であれば用いなければならぬであらうし、普遍化されるまでには至っていない外語でも、それでなければ意味が徹底しない場合には用いなければならぬので、その点は充分考慮した上で用いばいいだろう。(麻生路郎)

## 不朽洞句帖

麻生路郎

謙譲であつたばか。隅で生き養子。要。要。と女医は老け晩酌の中でそろばんおかれる社長の子が社長。つて左り前胸投げて刺身を二人前造り



# 新川柳鑑賞

麻生路郎

〔二四五〕

三味弾いてあげて仲居と間違われ (千代美)

その席に行き合わせた場合、女が酌するのは常識であれば、気の利かぬ女とされていた。女であるがために酌をするということは宿命的であった。三味が弾ける女は三味も弾いた。それが座持のいい女とされていた。しかし、それはアプレの女性に通じる話ではないが、男女同権が叫ばれてもこの句のような事実が残存することは否定出来ない。仲居と間違われてすくなくからずムツとした女性心理を巧みにとらえている。

〔二四六〕

避妊法やめて産れんのにあわて (一善)

結婚してもまあ当分は子ど

もをつくらぬことにしようというのが、近ごろの若い夫婦の定石であるが、さて三年も過ぎ五年と経つと、家庭に子どものないのがどんなに淋しいことが判って来る。避妊法をやめて見たが、急に生れそうにもない。「なんで避妊なんかしたんやろう？」と今さらなげいて見てもはじまらない。こうした中年夫婦の心理をうまくつかんでいる。

〔二四七〕

神も佛もあるかと戦後から變り (日滿)

肝心のところで神風も吹かずに国は破れた。お守り札も一こうきき目がなくて多くの戦友は白骨となった。そうした事実を眼のあたりに眺めたので、戦後は神も仏もあるものかという心境に変わったのである。奇蹟的に帰還した人

たちで、斯うした心境になっている人たちが尠くはなからう。

〔二四八〕

モーニング着てもおつちよこちよに見え (しげお)

婚礼が葬儀か、それは判らないが、兎に角嚴肅な集りへモーニング着用で出かけた。ところが元来おつちよこちよの男なので、モーニングを着ても、おつちよこちよに見えたというのである。おつちよこちよいとモーニング、それだけでも、充分にユーモア味を感じさせられる。

〔二四九〕

パン買って喰べといてネと妻は留守 (文平)

話し言葉によって情景を出した面白い句である。映画に誘われたのか、婦人の集りに出かけるのか、それはこの場合問題ではない。兎に角外出するのに、食事の準備もしないで出てゆく、若い妻の云いそうなことを的確につかんでいる。

〔二五〇〕

時代ですなアと息子を持つ同志 (日本村)

「うちの息子は僕はお父さんをやよう養わんよと、ハッキリしたもんだ」

「フーン」  
「では働けなくなったら、どうしたらいいんだと云ったら、養老院へ行ったらいいじやないか。有料の養老院があるよと澄ましたものさ」

〔二五一〕

スポンサー羊羹の次胃腸薬

偶然ではあろうが、羊羹のスポンサーの次が、胃腸薬のスポンサーだったので、フト興味を感じたのである。しかし、スポンサー自身にはそんなことを思ふ余裕なんか有る筈もない。自分とこの商品を宣伝するのに懸命なのである。それを思うと又おかしくなったのである。

〔二五二〕

月光に人みな同じ感歎詞 (太郎丸)

月下に立って月光の美にうたれた人が、思わず心の底から発する感歎詞はみな同じだというのである。作者の自然

に対する澄みきった感受性を想わされる。

〔二五三〕

銀行の担保の家の白椿 (三林坊)

銀行へ担保に這入っている家に白椿が咲いているというだけの句であるが、歿落しかけている家の寂寥さが出ていてしみんとしたものを感じさせられる。

〔二五四〕

啄木を晶子を語る妓で売れず (春日)

石川啄木の「一握の砂」がどうの、与謝野晶子の「舞姫」がどうのというインテリ芸者だけに、媚を売ろうとしないのであろう。男の脱線を理解することの出来ない、イヤ男と一緒に阿呆になれない妓が売れる筈もない。そこをとらえたのがこの句である。

〔二五五〕

腹立ちが自由に出せる地位となり (春雄)

すぐさまクビの心配をしなればならぬ地位にいては少々癩に觸れることがあっても

真ツ向から腹を立てる訳に行かない。家に帰って妻にあたるか、ドツカの呑み屋でウツを散じるより術がないのであるが、それが、腹が立ったら誰に遠慮もなく自由に怒鳴ることの出来る地位になったのである。ヤレ／＼、これで、俺も生甲斐があると思う、そうした人間の心理をうまくつかんだ句である。

〔二五六〕

悪例になると犠牲を一人出し (祐助)

こんなこと位で辞めさせるのは怪しからんというのはそちらの考え方で、こちらとしては、あいつの時には問題にされなかったのに、私の場合には何故辞めさせられねばならないのかという人が出て来ないとも限らないからである。気の毒だが、辞めさせるより手がないのでギセイを一人出したという穿ちの句である。

〔二五七〕

老嫌はシンネコの意を辞書でひき (白香)

世なれないオールドミスのこと、知らんことが多い。温泉マークも、キツス・

マークもハッキリした意味は判らない。僅に想像を逞ましくするだけである。

シンネコにいたってはサツパリ判らない。そこで辞書を引いて見たというのである。いかにも老嫌らしいところが、よく出ている。笑えないおかしさの句である。

〔二五八〕

無理矢理に吞ませあんたもいけますな (潮花)

「もう一ばいどうです」「もういけません。全く不調法なんで」

「いけんことがありますか。あんたのお父さんはなか／＼の呑み手だったからなア」「父はまアかなりやりましたが、私は全くいけませんので」「では、もう一ばいだけ」「それでは、ホンの少しだけ」

こんな調子で、無理矢理に吞ませといて

「しかし、あんたも、なか／＼いけますな。矢張りお父さんの子ですね」

髭として眼に迫って来る句である。

〔二五九〕

どの雨も池へは圓となつて落ち (妄夢)

なんでもない表現であるが、詩味を感じさせられる。静に物を観る作者の詩性が遺憾なく表出されていると思ふ。

〔二六〇〕

先に脱ぐ手に手拭を持つてかれ (猫三)

日曜の午後か。今日はお父さんに連れられて銭湯へ行く。

お父さんは猿股のヒモが堅くてほじけない。グズ／＼しているうちに、子どもは素早い、パツと脱ぐなり、そこにある手拭を持ってサツサツと浴室へ行ってしまったという写生句である。実に軽妙に、銭湯風景を写している。親も子も生きている。

〔二六一〕

ガス風呂の見積りだけは見積らせ (省三)

家庭に風呂のあるというところが、サラリーマンの念願

だ。しかし、風呂を焚く者の身になって見ると、かなり辛い。折角風呂がありながらつい焚かないで銭湯へ行くことになる。行くとなると面倒だ。殊に遅く帰った時などには行く気がしない。今日も行けない。いっそ、ガス風呂にしたらという気になる。

「不経済でしょう」と妻はもうガス代が気になる。「ウン大したこともあるまいが、差し詰め設備費が要るさ」と夫の方は設備費について考える。

「まア見積りだけ見積らせて見よう。それからの事だ」という穿ちの句である。

〔二六二〕

御亭主の儲け誇示した舞ざらえ (修三)

舞ざらえというものは莫迦々々しく費用のかかるものである。デカ／＼した衣裳にウンとかかるだけでなく、御祝儀が予想外に要るのである。そこへ虚栄心も手伝うので、一寸やそつとの収入では舞台を踏む訳には行かない。勢い

御亭主はどんな働らき手かと思わせるほど派手に振るまうものである。

〔二六三〕

おえら方やつぱり女工の顔を見る (方大)

工場へ這入ると、機械よりも女工の方が眼につくものである。若い学生が視察に来ると女工の眼が一斉に学生の方を見るのと同じ心理かも知れない。おえら方はもう相当の年配者なので女工達から見られるほどの魅力を持ち合わさない。あゝ、それなのに、おえら方が、あいつは一寸踏めるなアとジツと女工の方へ眼を据えるのである。たかゞ女工だとも思わないで。

投句用 柳箋

一冊(五十枚綴)三〇円  
送料八円  
御註文は社宛に願います  
(切手代用可)



大阪市 中島生々庵

私を信じて呉れませんかは更年期

かたくなにさせたとかたくなの方が云い

豊中市 戸田古方

善人ならもっと若死したろうに

インテリのどれもたのもしそうでなし

こうなつてから体力がいい出され

くたびれて来たのも道理安すぎた

めくら千人チャッチャッチャツとだまされる

大阪市 市場没食子

待人は来らず粉雪頬に解く

日曜日気なしの客が来て灯り

君僕の子も君僕の間柄

禿げたのへ唄わそとして婆々芸者

ホノルル市内藤草一郎

養老院移民哀史が又一人

ひっそりと本が読みたい子沢山

左前胃腸が知らぬ間になをり

仕事より仕事の無さが疲れさせ

商売を唯一筋が淋しかり

東京都 宮田不二

成金に聞けば飛行機早いとか

ほけなすもそろそろ汚職出来る地位

川の字に寝て極楽が判りかけ

郷里の息子の嫁にと思ふバスガール

米子市 三鴨美笑

遠慮せぬ癖を皆んなにさげすまれ

気取りやのくせにお金を持つとらす

嫉くことはやめて嫉かせることにきめ

東京都 前山北海

子に頼る愚を諦める五十代

貧困な政治で家族制にひび

熱海から女はがらり弱くなり

汽車の中儉約着けば贅尽し

映画見てシンデレラの夢描く娘

大阪市 正本水客

詩のことを話して居れば風の音

長男は呑める口だと妻が言う

死にやはった人を済まない例にする

あかぎれの手をアルサロで見付けられ

母入院

入院の自動車呼びに十二月

母逝く

母の居ない三畳開けてまた閉める

大阪市 丸尾潮花

舞初めへ恋の脇役あいつとめ

河豚ちりへ雪が散り込む窓をあけ

人妻の恋はむしように逢いたがり

楽屋騒然うちの帯揚げどこえいた

夕ざれば紅白粉となる巷

面白く工事はかどる年の暮

ライターの石も正月買うておき

紋付を着てもやきもちおさまらす

怒り初めやとお父ちゃん無視される

葬式で引いて来た風邪不気味がり

下関市 桜川不水

華かな程幸福でない夫人

いさかいても程なくやっていゝ夫婦

露地裏で疲れた春を笑ろて生き

数の子はもうよい子供産まいでも

禿と白一別以来二十年

ヒス黙否二刀流には参つたり

涙涙泣く安らかき男知り

大阪市 武部香林

お元日橋の下にも旗が見え

帰朝して丹前さし身青畳

悪友が真つ先きに踏む青畳

心抜がるほどの悟りをまだ知らず

大阪市 福田安夢

お金では売らずダイヤのお札なの

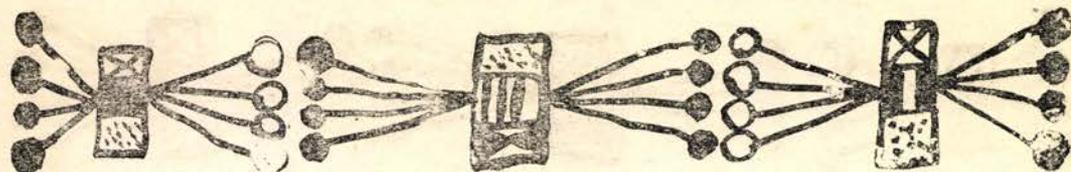
税務署の説明会で漫画を書いてきた

屋上で晴らせるウツパンがあり亦たのし

出雲市 尼緑之助

又仕切り直して春の陽に対す





時々バツチの顔で呑み歩き

下関市 石川侃流洞

河豚酒の一吹寿永の音で鳴り

逮捕状男を上げた顔でいる

云うなればウツカリ婦人は僕の妻

廓の昼表情忘れた妓いる

大阪市 安岡珊瑚枝郎

陣笠は横槍さえも儘ならず

広島県 山田季賛

ボナスへ割勘代が多すぎる

安物の晴着へしわを寄せて居る

大阪市 山本葉光

チャンスさえあればの自信まだ捨てず

狂人の根気強さに負けて置く

岡山県 木村千容

候文句新仮名づかいふりむかす

オシャレさすための鏡も買うて待ち

ことし古稀座椅子が欲しいなと思ひ

女中とは扱えぬほど垢が抜け

神職へエキスで式を頼みこみ

倉敷市 田垣方大

卵割るにも素人と調理師と

十万をたかがと言わすアルコール

サラリーマン二日続きをもう覚え

石川県 那谷光郎

葱下げた主婦街録に意見あり

初喧嘩勝った子の母詫びに来る

退社してやっと二人の仲が知れ

小火騒ぎ父の晩酌たぢろかす

帰還した夫の前歯二枚欠け

マツチ貼る母と並んで子の机

妻の余得古本貫で計られる

石川県 野村味平

白紙にもどし名士にまかしとき

大阪府 木村水堂

牛肉が親にあたらぬ子沢山

やりくりをしてると見えぬ自家用車

婦人会幹事としての口答え

堺市 八木摩天郎

手不足へ税務署まで来て坐り

四年後を案じられてる議員さん

倉敷市 水谷谷水

生活をくちににするほど二号老け

親は親なりに仲人をうらみ

課長に強いられて飲んだを本気にし

嫌われたからとて自殺までせずも

私もう二十八よと叫びたし

盗癖のある子でなにをしてもでき

そんな気じゃ大成せんと飲ませられ

未亡人と聞かされてから気前よし

保険金欲しさが町を全部焼き

倉敷市 相原一善

横隊の娘に腹が立つ十二月

一年の計呑みながら呑みながら

袖の下効かぬ上司へくたびれる

岡山県 田村藤波

貯金した時だけ窓口札を言い

もう止めてほしい祝詞がまた一人

神棚へ届く背高の嫁をほめ

岡山県 岡田夜潮

私立校もよし俺等の頭では

負けぬ気が隣のテレビ見に行かず

大枚の貯金も窓口驚かず

田舎出へ河豚奢ろうかと脅し

しもやけの手がよる末座の火鉢なり

解析を知ってお米の値を知らず

岡山県 臼井三林坊

ジャンパーで金の工面は上手なり

厄年の正月早々風邪をひき

岡山県 本田恵二郎

写真ではMが勝つてるとは見えず

母方の籍とも知らず生れおち

こゝからが密談と云う酒が冷え

綴方あの子にあつた心がけ

大阪市 真鍋一瓢

度忘れと言う逃げ方もあるのなり

合成年今日は大つもごりなるぞ

呑ん兵衛のレットルがあり行き難し

地下足袋がピシャ／＼と戻る露地

京都市 松川杜的

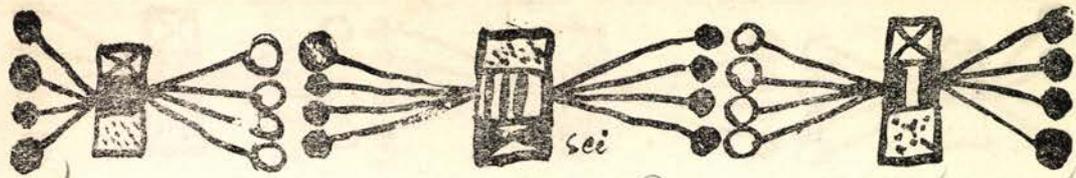
世相險し上役の死を待つも

人並の方が口でのしり上り

大阪市 永田六龍子

一人位居たらと近所の子の晴着





偽りを上手に言えて淋しかり

おしゃべりをしても割勘以上喰い

大阪府 川端 鬼 醉

墨染へ下駄まで丸いのをうがち

千鳥足晴着の方へ方へより

月がいゝなどと一口やるつもり

大阪市 木村 十 悟

売春法鼻で笑って女侍ち

プランには遠く場末の小商い

おこつて親父の夢で年を越し  
悪酔の真似愕然と子を見詰ぬ

かっぽうで学ば無かつた爛加減

接吻のあとのうがいを見つけられ

婦人雑誌良人を尻に敷くページ

寒い駅スキーマのポスターばかり張り

豆腐屋がつかめば豆腐堅く見え

窓の陽の座席占めたに直ぐカーブ

初風呂でくしゃみすると運も知れ

たまに花活けたら壺の水がもり

寝正月隣もコトリとも云わす

回診に何読んでもと覗かれる

双葉以後父横綱の名を知らず

羽根取ったついでに屋根も直しとき

お賽銭千円札はさくらです

倉敷市 長尾 越鳥

承諾を逃れるうそが見当らず

案の定守衛に現場おさえられ

倉敷市 佐藤 千代春

松風の肌ざわりよし野天風呂

晴れてゝもおかまいなしの迎え傘

山口県 津秋 六花

大吉へもう計画は強気なり

ニコヨンにもうなりきつた大学出

神戸市 野村 初市

内弟子を皆んな去なした松の内

美容師も和服を着てる三ヶ日

抱き上げて賽銭桶の底を見せ

歌舞伎座から出たスキ腹をかきにする

あの世までマイク向けたしノンキ節

石田一松死逝  
大阪府 金井 文 秋

リベートの事まで税吏もうしらべ

晩年の運も逃がして駅に寝る

財布ぶち開けて上手に値切つて来

岡山県 大橋 游子

特権の一つも無くて今日も暮れ

吃るまいとする兎の顔へ眼をそむけ

岡山県 戸田 喜 楽

唐津市 新潟 回天子

正月もせわしせわしと若々し

正月の惨事

人多く神威及ばぬ大惨事

老人になったを満員バスで知り

恋に使う金にや未練はなかりけり

岡山県 池田 古心

大晦あど何をして何をして

自惚れて居たら他人に嫁に行き

慷慨の果ては飲屋で夜を明かし

お元日家風を云うて戸も開けず

仲人の話になって火鉢が出

岡山県 坂手 有子

婦人科で諭されたのに又宿し

ささやいて中華おそばで済しとき

童貞を奪い年増のメーキャップ

岡山県 土井 雷山

「川柳塔」の人たちが毎月ドン／＼出句される

よりに不二田一三夫氏が標語会の人たちに「川柳

塔」総出句標語を出題されたところ八十八の標語

が集まった。何れも苦心の作であったが編輯局で

下記二標語をいただいた。「横綱もヤ・ヤが繞け

ば句が落ちる」「一句でも作苦の花だ総出句」こ

れに應えるためにも大いに出句精進されたい。



# 親子旅

この父と この車掌

東野 大八

「ねえ、おとうちゃん、四国の  
お母さんも来年八十、齢が齢だか  
ら子供たちを連れて新年の学校休  
みを利用してでかけましようか」  
とある夜、女房が切出した。昨年  
暮のことである。

「行かたつて君、先だつものが  
ないじゃないかね」  
とこちらはいゝ話だがカンジンの  
モンにこだわつてさつぱりノツて  
ゆけなかつた。

「その点は大丈夫、私のヘソク  
リで三年定期がとれるから……」  
とカ、ア殿は至極おちつきはらつ  
てこゝろ答えた。

「金高はいくらだい」  
「二万円——別に憚らなかつた  
ていゝわ、千日を一日に直してご  
らんよ」

私はウムとうなつたまゝで、し  
ばらくはモノがいえなかつた。日  
頃はあつて無きが如き女房の存在  
だが、このときほど一個の完成さ

は、二万円の金が、イザ實際の勘  
定の場になると、春の淡雪のよう  
に取えない金子であつた事だ。女  
房にとつては七年ぶりの、亭主の  
母との対面である。義理もあり面  
子もある。土産だ、子供の洋服  
だ、靴だと準備に要る。その金子  
約六千円である。更にわれわれの  
運賃、私は片輪者だから割引で千  
円ですむが、女房、子供を合せる  
と往復四千円、それに急行券をふ  
くむとして六千円近くとなる。

と準備と運賃で一萬二千円、残る  
金はわずかに千円札七枚である。  
「これで車中の飲み食い、不  
時の病氣や事故を予想すると五人  
の道中には心細いわね」  
と女房心細げに案じ顔だが、この  
話に私はとつきに一計を案じた。

「よし、三千円浮かそう。子供  
三人とも汽車賃をタゞにしちま  
うんだ」  
「大丈夫、あんた」

任せとけ、と私は直ちに、実行  
に移すことにした。がである、一  
番上が三年生で次が一年生、末っ  
子が幼稚園である。末っ子は問題  
ないが、上二人はまことに大柄で  
どう押えつけても無賃の資格はと  
れそうもない。だが、そうかとい  
つてわれわれの経済事情が許さな  
い。そこで私は汽車に乗るに當つ  
て、一番上には「赤いきれを腕に

巻いたおまわりさんみたいな人が  
きたら、すぐオシッコに行くか、  
オリーブをかぶつて寝るんだよ」二  
番目には「いくつときかかれた  
ら、幼稚園」と答えるんだよ、と  
ねんごろに因果をふくめた。

東海道線は、急行をさけ普通に  
乗つたが話通り大変な混雑。一同  
チリムゝになつてしまつたが、立  
ん坊の私は心で解放感を味わつ  
た。「この調子なら検札も来ない  
だろう」その通り大阪に安着。だ  
が大阪駅の出札を前にさつて困つ  
た。この関門をどう通過するか、  
熟慮の末、上二人を別々の改札か  
ら人にまぎれて出るように教え  
た。心得た二人は面白いね、とは  
かりちよこちよこことどこかへ行つ  
てしまつた。これでよし、と構内  
の広場へ大手をふつて無事に出た  
われわれだったが、今度はその二  
人の子を探さなければならなかつ  
た。

「大丈夫かしら、あの子達——  
と女房が末っ子の手をヒシとにぎ  
りしめておろおろとあたりを見廻  
す。「やあ居たい」私は、はる  
か前方でキョトンとしてゐる二番  
目の方へうれしげに走つた。女房  
もまた一番上をどこかでみとめた  
らしい、こゝよ、と懸命に手をふ  
つてゐる。

「どうも三人お揃いの赤いオー  
バは可愛くつて人ごみにも目印に  
なつていゝが、座席にかたまると  
具合が悪くていけない。方々に散  
る必要があるね」  
と宇野行の汽車の中で私は嚴肅に  
いつた。一家一つ座席に水入らず  
で旅を……それが女房の楽しみだ  
つたらしいが、これも節約のため  
なら致し方ない、彼女もこゝま  
でくればそうあきらめた様であ  
る。

手腹線は有難くも空いていた。  
然し空いていることは、検札急襲  
のおそれがある。私は出入口を絶  
えず警戒していなければならなかつ  
た。そのためロクに眠りも出来  
なければ本もよめない。ホレ来た  
寝ろ、ホラおしっこ、と赤腕章の  
現れるたんびに、この参謀の忙し  
いこと。こうして今治近くまでき  
たとき

「ねえとうちゃん、あんたいく  
つときかかれたら幼稚園というんだ  
ね、そうだね」  
と不意に二番目が大きな声で念を  
押しながら私の後を見上げる。

「そうだよ、おりこうね」といゝ  
ながら何気なく私がふりむくと、  
それが問題の車掌で、しかもハサ  
ミまで持っていた。思はずキモを  
冷すと

「おりこうなお嬢ちゃん」  
年輩のその検札はそういつて笑い  
ながら仕事をすませて行つてしま  
つた。私はしばらくの間は、胸が  
ドキドキしてどうしても落つてな  
かつた。



は嬉しい気分であつた。その万よしが安部磯雄氏の社会大衆党から市会議員に立候補した。これは、先頃、脇田梅子さんが立候補されたよりも大事件であつた。演壇の横に警官の椅子席があつて少しおだやかでない言葉を吐くとすぐに「弁士中止」と言論を封じた頃の話である。衆議院に社会主義政党的幹部の大部分が議席をもたなかつた頃の話である。安部先生と麻生久氏ぐらいが議員であつたかも知れないがたしかなおおほえはない。当時の府会議長某が、社会主義者を応援するような川柳誌は後援しないと云つた頃の話である。万よしの義弟安井ひろし君のなしよ話によれば、陸軍予備中尉庄健一は思想的には右翼の方であつたそうである。私は、芦辺劇場の裏の選挙事務所へ手つだいに行つた時の事をおぼえて居る。うすぎたない部屋であつた。隣近所は盛り場にはたらく男や女が一人で住んだり世帯をもつたりして居て廊下におしめが干してあるような陽当りの悪いアパートであつた。選挙の手つだいははじめての事として勝手がわからずろ／＼しながらそれででも葉書を少しばかり書いて居ると風になつた。灰色の瀬戸物のさむ／＼とした弁当を喰べた事をおぼえて居る。島の内の何とか小

学校の演説会場は大盛況であつた。万よしは当選した。六階議員と言つた人があつた。二階借が四階議員の悪洒落である。その後万よしは何回か当選して大阪市会では古参となり名士となつた。その後落選した。それから府会議員にも立候補した。これも落選した。そしていつぞや死んだ。

いっぴきの酒の虫とぞなりに  
ける

万よしにとつて何がよくて何が出世であつたか知らない。私にとつては市会議員庄健一先生よりも関東煮屋のおやじで川柳も作る万よしの方が好きであつた。彼が初当選後、私は南の夜をうろついても淋しかった。

駅前のあるべきとこにうどん  
そば

私は旅が好きである。旅先でいろんなものを喰べるのが好きである。うどんやそばはなるべく喰べる事にして居る。めん類が好きならばかりでなく、うどんやそばには何となしに旅先の土地の匂いが浸みこんで居るからである。だから私にはめん類の匂が多い。

秋もや、夜鳴うどんの辻とな  
り

夜学の戻りに本町橋西詰で夜鳴をたべるのがたのしみであつた。たのしみどころか喰べなければ腹

がもたなかつた。七銭であげのきざんだのと蒲鉾のうすい一片と葱も葉味もたつぷりふりかけて毎晩二杯喰べるには少しふところがさみしかつた。一杯の出汁に玉を二つ入れて十銭、この特製品を自ら発明して強制的に買入れることにしたが、夜鳴の親父も、こんな発明をする少年の純情にほだされてか、こゝろよく特製品を発売してくれるようになった。秋もややの句の裏にはこんな哀話ひそんで居るのである。

秋風やきつねうどんを一つ喰  
べ

道田葉平さんはこの句を褒めてくれるが、何のことかわかりませぬ、という人もある。わからない人に無理にわからせようとは思わぬ。俺のこんな詩情はお前等にとてもわかるまいとお高くとまつて居るわけではない。五十をすぎた私には仕方のない事は仕方がない、というあきらめがあるからである。俳句か川柳かわかりません、と言つた人もある。その通りである。秋風やという俳句じみた帽子を着てうどんを喰べながら川柳家の園遊会で遊んで居るような歌作である。たゞこゝで、はつきりして居るのは、きつねうどん、である。略称、きつね、別名、すつね、玉はうどん、である。これ

に対し、略称、たぬき、別名、たみ、に分類される。いや、待つたのき、の玉は、そば、である。う／＼、もう二種類を加えなくては正確ではない。名古屋名物に、きどんにくらべて色が黒いからである。しのだ、というのは、きしめんと称する物がある。うどんつね、の雅号であり、芦屋道満大内鑑の子別れの段和泉信太の森から来た言葉である。きざみ、とね、と、きざみ、の分類ありとすればこの二種類を加えなくてはなまきつね、はあげ、を原型のま、甘辛く味つけしてうどんの上へのせだものであるが、その、あげ、をば、このように厄介なものであ味つけせずに刻みこんだのが、きざみ、である。きつね、を甘狐と称し、きざみ、を辛狐と、味によつて分類する者も一部にあつたけれども、最近では、きつね、と、きざみ、に学名が統一されたようである。以上学界の各説を総合して要約すると、喰物のきつね、には四種類あつて、うどん玉のきつね、ときざみ、そば玉のたぬきときざみ、を一つごまかし旅終る

麻生 葎乃 著・米田三男之介装幀

葎乃 福壽草

句集

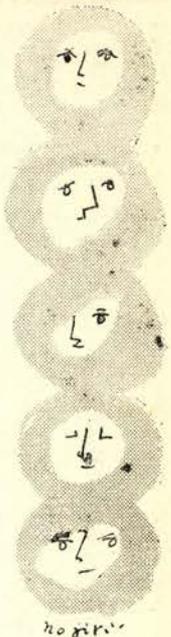
定價二百五十円  
送費 三十円  
菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいたて居ります。

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雜誌社

櫻井口東大橋七五〇五番 電話住吉(町)六〇八一



# 川柳第二教室

## 作句指導

戸田古方

### 比喩の句について

比喩というのはたとえることであります。今回の出題はいろ／＼の喩え方のある中の一番組でもよくつかう直喩というのであります。……のように「……の如し」と直接にならべて効果を出そうというもの、しかもなるべく縁遠いもの程面白くなってきます。

平蜘蛛のようにあやまる違約金 龜庵

という句があります。型通り「……のように」がつかってあります。何か違約したのでしょうか、大それたあやまり方をしてるので、そのあやまってる様子を平蜘蛛にたとえたのですが、この比喩の材料はいく古した、少々古い感じですよ。

いくじなし平蜘蛛のごと畏まり  
これも同巧異曲で、「あやまる」が「畏まり」にかわっているだけ

で何のために平蜘蛛になつて

かの理由、投げ飛ばされたか、おしつぶされたかそれを説明してあります。この程度の説明は最小限の必要で、これがないと句意が不明瞭になつて来ます。だがこの句をさらに推敲するとするならば、この辺をついてみるべきでしょう。あとの句にはさらに説明語とみなすべき「いくじなし」が入っていますが、これも「工夫ほしいところ」です。私の句に

土下座してあやまったのも手であつた

というのがありますが、「の」も手であつたで漢詩にいわゆる起承転結の「転」がこころみられています。さきの二句の平凡さはまっ正直にその場の情景をたゞ写しただけに止まっているからなのでしょう。

猫の如口説かれるのを待つてあり  
文平

「如く」といわないで「如」とつづめたのは微酔さんのにもあつた音数の関係でつづめたものでしょう。この「待つている」のは女です。猫を女にたとえるのも別に新味はありませんが、平蜘蛛の句より味があります。猫のもつマゾヒスムスには魅力があります。

ドラ猫のように家出の娘を  
しかり 龜庵

前の猫とくらべますとこんどはしかられている猫としかかれてる人間とのモンタージュです。場面ははつきりしています。しかもたゞの猫でなくドラ猫ですからより一そう真にせまつて来て面白味

泣いている子よガラスわろてるぞ 登

これは「泣いている子よガラス（が）わろてる（ようだ）ぞ」と補つてみますと、はつきり直喩型です。この句はそれをせずになんか出しています。巧みな省略です。それだけ強くなつて来ます。壁に耳あり、障子に眼ありは昔のこと、ガラスといったところは仲々近代的でメカニズムです。

残り物食つてる女中豚太り 豊年

どこかの代議士の憲法改正論の中で残飯を喰わされて殺される豚になりたくないといったとかいわぬとか。まさか女中が豚太りしても殺されはしませんまいが「豚太り」



## 雑川 婦人友の会の集い

藤村梨花記

ちらりと春を覗かせる様な曇り空の一月二十二日川雑婦人友の会第一回の集りを本社で催しました。家庭をお持ちの方々が多いのにも拘わらず大阪時間と悪口を云われる事もなく一時半頃予定していたよりも多数の人に集まって頂きました。

お互に「川柳誌」では何年来の  
おなじみも、はじめて御本人にお目にかゝって各自の想像よりいくらかずれているのを皆それ／＼感じられたらうと思ひました。お目にかゝって最初はやはり自己紹介を型の如くし、改まった皆さんの気のほぐれるのをまっ、兼題「花嫁」を句箋に書き句会に御無沙汰の方々も、句会の雰囲気懐

花瀬尾丸・柳路生室・乃蓮生室・子徳木八・子詩郎田赤・兼若部武（右から右つ列列向）  
藤（右から列後）子換高・子良田太・子ナハ中・子ちみ江・里梨生室（右から列中）一明説写真  
（略略略）月春本塚・子代花内竹・女乙華島川・子さき藤内・子清田酒・花梨村









初刷に二大政党の初笑い	同	お元日だから忙しい小商い	同
七福の声賑やかな宝船 <small>愛媛県</small>	堀内 暁風	雪踏んで帰るに心燃えた儘 <small>大阪府</small>	浅野 瓢太
宝船紅一点を取り囲み	同	母の顔知らぬまんまの子が素直	同
晩酌へつい過したはい話	同	お守りを外して手術信じきり <small>西宮市</small>	徳永 貴美
丹前になって覚悟が出来ており <small>兵庫県</small>	前川左文字	妻がぬる紅の気になる共稼ぎ	同
寒いから一緒になったよな夫婦	同	おしる粉を食べる息子で頼りなし <small>岡山県</small>	太田 蓑流
まだ寝ないつもりか妻は炭をつぐ	同	注射だけするの一番汽車に乗り	同
へそくつた事がかつぎ屋からは <small>岡山県</small>	田淵 正平	金出来て時代錯誤に取りつかれ <small>倉敷市</small>	野田 一念
撮つてやる〜とてモデルにし	同	若水で入歯清めてのりとあげ	同
合槌の割には金を出し渋り	同	乳呑児も殿と呼ばれて焼香し <small>尼崎市</small>	中屋 すず
薬までも金に換算して税吏 <small>滋賀県</small>	土守トン坊	黒付をのがれて娘歌わされ	同
悪友を揃えて妻の留守を飲み	同	育児の本どおりに子供すねている <small>松江市</small>	舟木与根一
屏風借りて華燭の座敷出来上り	同	おそろしい自信で通るアラモード	同
寝正月済んだら風邪で寝てござる <small>大阪市</small>	竹内花代子	急がない仕立て届くも十二月 <small>平田市</small>	久家代仕男
吊柿恋も一処に送って来	同	言葉尻捉え本論そっちのけ	同
弾初めへ派手に切れてる三の糸	同	共稼ぎ炬燵で鞆の寿司を出し <small>岡山県</small>	佐藤龍山坊
二十歳の元旦母さんに眺められ <small>天理市</small>	仲野花鶴美	家族留守勝ちで女中が見るテレビ	同
療養が映画見にゆくスリルもち	同	青春のパフがおむつのパフとなり <small>今治市</small>	越智 一水
友からの賀状退院せかして来	同	初稽古コトんとせんすの音に新春	同
打ち明けるつもり火鉢に炭をつぎ <small>玉野市</small>	星川 陽石	酒が水の様になくなる松の内 <small>粟子市</small>	八杉 風車
あれ程の美貌で二号とは淋し	同	無理をした餅とは知らず艶のあり	同
紳土服着れば父ちゃん肩がこり	同	雄鶏のこころ初日の出に對ひ <small>大阪市</small>	橋高薫風子
今日よりは成人サツと飛び起きる <small>鳥取市</small>	北村 三歩	毛皮着て貧しい心とは見えす	同
風邪一つひかずに河豚で死んじま	同	門松は立てずやっぱり屠蘇に酔い <small>宇部市</small>	岩原 滔川
好きなどこに嫁くの娘涙見せ	同	厚かましオマツシヤロと上り込み	同
この頃は給食・パンを持ち帰り <small>愛知県</small>	岩川 一貫	ない〜のすくしでも良し新世帯 <small>岡山県</small>	片山 百郎

いることも事実なのです。質屋を出れば今日は満月、野雨、質屋といういと俗っぽい人間臭と月というものを対照させている自嘲ともとれますし、客観化した、頭で出来た句とも見えます。質屋のことより考えないとすれば人間ほどやり切れない、いたましいものはありますまい。

川柳の徳は客観化の訓練であるともいえます。深麻酔にヒ、フ、ミ、ヨ……と数を数えるように、吐が立ったら数を数えてからものはいえといふきかされたことがありません。

理にかたむけば角が立ち、情に竿させば流されるのは何も激石ひとりの嘆きではありません。川柳は俳句よりも理性の役割は大きくはたります。理の度合によって川柳の批判性というものが生れ、情におぼれないところに客観化がなり立ちます。

自己から相手に延びる距離を理性とし、相手から自己へせまってくるものを感情と見ますと、こゝに三つの図がかけられます。一つはその線の長さが等しいときです。これは適当な統御の出来た状態でも、もっとも理想の型です。人間はいつものころありたいと思いつながら、実はそうばかりはまいりません。自己と相手を非常にはなして考えたりします。理性の線は相手に行きついても感情の流れる余地をのこしません。相手が遠すぎるものですから鮮明に見えず、



裾分けて貰えばこんな味が良い  
 どさくさで儲けて世間馬鹿に見え 倉敷市  
 除幕式極道知らぬ像となり  
 抱いた子に手紙持たしてポストまで 尾崎市  
 抱いた子の笑くぼに指を当てて見る  
 大晦せめて煙管を買ひなはれ 青屋市  
 重詰の傷みやすいをよって食い  
 年頭所懐  
 決意することあり初日を起き待ち 出雲市  
 先生に富山の葉は秘めておき  
 ヘイマンボ踊っていた子の初島田 倉敷市  
 古代史を読む子の上に螢光燈  
 健康が一と通知簿にはふれず 玉野市  
 テレビ塔の高さを眺めているあき  
 団体をそれて知人の無事を訪い 和歌山県  
 湯に浸る旅へ留守居を頼みに来  
 ダシ昆布の味がして来る老夫婦 宇部市  
 恐妻も内助の功となる師走  
 簡素化をどこ吹く風と嫁が来る 岡山県  
 勤初めの荒田へ化粧の雪が散り  
 夜霧して燈りのにじむ海豚の宿 天運市  
 WMもWに返る年の春  
 供米も庭にある間の裕福さ 貝塚市  
 病院を申の年とぞ戯れ申す  
 我乍ら所を得たり切こたつ 大和高中市  
 二見では寝巻で賞める初日の出

同 荒木 狂風  
 同 静岡ちか子  
 同 黒田一十  
 同 竹原 雲平  
 同 平田 愁水  
 同 小坂つよし  
 同 木下 一休  
 同 糸永 風柳  
 同 佐々部 藤佐志  
 同 和田 蛾燈  
 同 小田 柳叟  
 同 岩垣日本村

三ヶ月甘党そろく付け焼し 米子市  
 御歳暮がお神酒に交るお元日  
 初恋を忘れる為に結婚し 堺市  
 抜声器驚嬢はオールドミス  
 初恋を語ってそれが家内です 貝塚市  
 別れの日予期してたとは淋しいね  
 正直に年を云うたら馬鹿にされ 米子市  
 成人へあれもこれもと慾なこと  
 桃割へ仕事始めが手につかず 下市市  
 桃割にお転婆封じられた顔  
 稲の出来褒めれば闇は安いか 岡山県  
 希望せぬ口の方からます決まり  
 整形科で鼻を低くする人に合い 岸和田市  
 御希望にこたえ背広でどじょう 同  
 初雪の朝の雨戸を子にゆすり 岡山県  
 竹馬へ使い頼んで気にかかり  
 ボディビル明日を夢見る骨と皮 大阪府  
 挨拶はどもり雑談は人の倍  
 初春うれし患者も病衣更えて待ち 貝塚市  
 よい子持ちですと福祉でい 同  
 初詣年玉当る神にきめ 大阪府  
 一台に載るを二台で初荷行く  
 八起目は五十路の坂を越していた 貝塚市  
 宿題の答出来たら腹がへり  
 残業のかせぎ薬代とはさびし 堺市  
 結婚十年世帯になれた肩が出来

石坂 新雪  
 同 辻 圭水  
 同 安永芙美子  
 同 木村 紅帆  
 同 宗貞 白馬  
 同 沼田 三六  
 同 金子 紀人  
 同 西山 晴々  
 同 伊藤 光二  
 同 阿部かつみ  
 同 赤塚 樂天  
 同 坂本阿季良  
 同 飯尾寄与史

おぢのぼろぼろしやう

相手への観察すら充分に行きとどかないのです。真実をつたえることさえ困難になり、こんなものだ、あんなものだ、まことに大ざっぱな見方しか出来ません。遂に自己と相手が近すぎますと感情が十重二十重に折れまがり、第三者には解せぬ片輪ものを作ってしまう。

下戸の酌マということを考ず  
 矢寸志  
 テーマは正にこゝをついているのです。上々の穿ち、上々の笑いです。

機関銃のようにまくし立てられると、それがたとえ聞くにたえる名言であっても味もそっけもなくあります。音楽しかり、絵画しかり、場合によっては極く緻密な設計図の下に予定されるマというもの、自己と相手が近すぎてはとうていマなど考えられそうにはないのです。

仏陀より今なでている女の手  
 勝二  
 「いろは」歌「色は匂へど散りぬるを我世誰そ常ならむ有為の奥山今日越えて浅き夢みし酔ひもせず」は仏教の真髓ときいています。この句にもそうした悟を感じさせられます。結局人間は慾の色眼鏡がはずせません。それをコントロールするものが宗教の使命でもあるのでしよう。

仏教は真理を教えます。いついかなる時にも真理になつた行いを踏み外さないのが理想とかきい



成人の日父親に火を借りる 宇都市

M過剰今日はしとやか初春の帯

宿題の嵩で先生評価され 大阪府

働けど働けどの世を寝て暮し

毛筆へ人が変わったような祖父 岐阜県

家出した荷物が重いハイヒール

追羽根が屋根に止まって呼び出され 大阪府

淋しさにコケシの首の向きも変え

サイダーを注がれて淋し病み上り 河内市

東京の人が尋ねた法善寺

処女寮の梅にとどかぬ手をのばし 岡山県

トビックニュース賑う春の サッフルム

子に生きる母は酒乱の父に耐え 貝塚市

腰痛で泣いては居てもよくしゃべ

社会保障へ廻してほしい警備艦 貝塚市

初姿癒ゆる日近き肥りよう

落ちぶれたピストル昼寝の夢を裂き 玉野市

いい時計持つてて時間粗末にし

新築の当座箒もよく痛み 大阪府

綺麗好きとは赤ん坊の出来ぬうち

餅好きと言う男 童顔 笠岡市

欠勤がチャンスとなった臙首なり

職人の不機嫌すぐに顔に出し 宮崎県

パジャマ着て朝のマダムに色気

暖冬に煮メの痛み持て余し 大阪府

療養所餅の小さいのに呆れ 愛媛県

平田 実男

同

山中 翠星

同

加納 幸児

同

堀須賀太

同

原 牧童

同

大石 一久

同

杉本 一鶴

同

小島 さぎす

同

松岡 コンパス

同

三谷 聖聖

同

木山 二路

同

野口 卯之助

同

永田 都詩子

同

冬淋し井戸の水まで枯れてくる

倅わせの夢が泌みてる貸衣裳 大阪府

葬式の費用と十万円すすめられ

お経読む調子で祖父が読む社説 熊本県

振り出しへ戻りたい気の四十代

大黒を飾って質と手が切れず 貝塚市

お年玉子は手袋の中へ入れ

時計見いみい留守番の針仕事 新潟県

嫁もらうあかりがついて静かなり 松江市

初詣ですませてからは寝たつきり 奈良県

ニコヨンの母に暮の風まとも 熊本県

デパートの屋上みんな良い親子 岡山県

しつっこい小新聞東にから燃 大阪府

病人も屠蘇と言う名で飲んでる 金澤市

松葉杖つく子に風の糸持たせ 岡山県

それぐに隠し芸出す婦人会 岡山県

年賀状かがしとかいた人があり 岡山県

火の車百も承知で膝枕 米子市

金借りて他人行儀になっちまい 倉敷市

撥持った手で庭先の草も引き 貝塚市

病身の妻にすまない酒の息 兵庫県

君暮れに逝けど年賀は生きて着き 京都府

ひとみちやんだだそれだ 映画 貝塚市

初詣でオーバも脱がず額づけり 大阪府

産制に七五三まで気をくばり 七尾市

産制をしすぎかかり子貰って来 笠岡市

同

国島 孤舟

同

吉村 一舟

同

平山 潜雨

同

川井 美月

同

梶谷 冬生

竹田 義明

星野 草柳

山口 柳子

田中 弘己

松永 恒青

岡崎 一也

小田 紫草

松下やすえ

国谷 散歩

岡野風の子

護川 梢月

前川 越山

柿本 古竹

河揚 梵鐘

増本 夢人

池上知恵美

ています。「有為の奥山」を越え去れば喜怒哀楽に泣き笑うのが何と馬鹿々々しいことだったなあと観ずるのです。

いくら何んでも人間である以上、泣きもせず、笑いもしない状態になぞなれる気づかいはありませんから安心です。

鯛悲しや胎児もろさも食われたり川柳人は宗教家です。こんな句が出来るのです。

私はふと仏さんやキリストの後光というものを考えてみました。人格の抽象化といってしまえばそれまでですが、私はある日、夜のプラットフォームに立っていました。向うから列車が入って来ます。ヘッドライトをカビヤかせ

て、プラットフォームに立っている人は人ながらその強い光に包まれて、ほとんどその輪郭さえ認めることが出来ないのです。

後光って、後から大きな力にまもられ、照らされていることを現わしているのところがうのじやないかと考えてみました。

宗教と川柳とが一つになつてくるのです幸福の極致がちらりと見そめられた感じがです。だがそこまでの道の遠くてはるかなこと。

三十一、一五、私の誕生日に

### 歌会始と川柳

山本葉光

「歌会始」のように「俳句始」「川柳始」が出来れば天皇と国民との結びつきが一層はつきりとする



本宅はラヂオ二号はテレビと居岡山県  
 娘の仕度田地を売ったとも言えず大阪府  
 僕と子に寝る競争させ妻毛糸米子市  
 文化的な暮しをなどと嫁きおくれ日輝市  
 ばあさんに大当りです姫鏡台大阪府  
 寒波来てエビスの出入気にかかり神戸市  
 小使いの焚火を囲む腕カパー高知市  
 灰にした煙草の金が惜しい暮宇部市  
 黒田節唄ってたのが大いびき鳥取県  
 暖房のあるデパートを孫の守り京都市  
 彼女からの手紙細うく封を切り新潟県  
 どさくさに妻が迷い子になっちま倉敷市  
 二人乗り義足へ巡查眼をつむり岡山県  
 内職の方で名士の部に入り兵庫県  
 どちらへと聞かれ逢引とも言えず倉敷市  
 先輩が名刺の肩書見せに来る倉敷市  
 グラビヤで女傑女として語り廣島県  
 酎の匂いをさすとニコヨン元気松江市  
 隠し芸とうくやらずに停年富山県  
 愛の告白のポーズ考える神戸市  
 てんでんてん色街も練り歩き大阪府  
 初登庁まづ大時計規正する鳥取県  
 清貧と言つて世に出る才もなく大阪府  
 予算にはなかつた酒にふるまはれ岡山県  
 賀状とは別に本人飲みに来る高知県  
 消せ消せと子等の焚火へあたると来高知県  
 癒えゆけば鼻唄も出る今朝の春大阪府

杉本たつよ  
 滝井 貴洲  
 湯原 一机  
 竹内 啓坊  
 津田乃武康  
 傍島 静馬  
 北川 真一  
 神田 豊年  
 田中蛙眠子  
 楠 光二郎  
 高野むじな  
 山本 閑人  
 松下 衡陽  
 辻 文平  
 藤沢不二郎  
 矢吹 徳市  
 高島 勝士  
 小林孤呂二  
 島村 克児  
 佐野屋気楼  
 大西 斗牛  
 鈴木村諷子  
 西川 晃  
 池田 文女  
 建沼康之介  
 島崎 秀保  
 本村撰氏梵

押しかけて乗つたが車内空いて石川県  
 第二楽章から万才に切換える大阪府  
 業界のダニも生きてる業界紙大阪府  
 言いくい事で火鉢をなで廻し岡山県  
 冗談も言つて年より若く見せ松江府  
 金が出来義理人情がうすくなり今治市  
 末席へ無芸同志がかしこまり大阪府  
 振袖の影長々と初日の出愛媛県  
 初釜に一ふく平和の茶がかをり大阪府  
 貧乏に馴れた器用で袋貼り高知市  
 酒ほめて返盃まだのめる口表木市  
 三ヶ日過ぎて馴染の街になり大阪府  
 成人の子を持つ母でうらやまれ岡山県  
 クリスマス親の悩みが一つふえ大阪府  
 正月の女房はよく寝よく食らい貝塚市  
 元旦の邦楽やっばりびったりし呉市  
 待望の課長になって肩がこり笠岡市  
 同値なら美人の店で買う若さ東京都  
 仕合せは母も一所に泣いてくれ今治市  
 弁償のお気持だけを受けておき岡山県  
 提案に味方が増えてほっとする石川県  
 孫の守さされ帰省も落ちつかず青森県  
 俵もう米が担げて嫁話鳥取県  
 現地ルポ読んで施策に腹が立ち尼崎市  
 大雪に姉長靴で里帰り尼崎市  
 こと聞く耳に粉雪腹が立ち尼崎市  
 鏡台をこわくのぞく快復期宇部市

塩谷三思楼  
 本多 武司  
 青柳扇子仙  
 杉山三男坊  
 岡崎祥月  
 越智 義夫  
 小林 文児  
 横田 放人  
 米浪進之助  
 山崎 臣一  
 岡田 健一  
 西田ひろし  
 野々口美舟  
 熊取谷泰夫  
 奥村 芳職  
 青木 微醉  
 出原 真奇  
 下獄 孝一  
 池内 好日  
 舞島 白露  
 松高 秀三  
 森本黒天子  
 石橋万古人  
 静岡忠八  
 林 澄子  
 久谷 朗留  
 上杉 雪峰

るだろうと思える。花鳥風月の歌より生活を歌つた庶民の詠進歌が増えたそうだが、恋愛等の庶民の息吹きの川柳や人間の「生命ある句」の川柳を味わって貰いたいと思ふ。

「福井県の老ニコヨン歌人が、有閑旅行的なのにはがっかりした。こうした人こそ切実な生活の苦しさを歌いあげるべきだ。この老歌人がモーニングを借り着して晴れの歌会に列席した」と、言う梨花さんが「女性と感傷の句」で「らしさ」に就いて語っていられるように、女性は女性らしく、ニコヨンはニコヨンらしく、病人は病人らしく、だけの個性の勝つた句は、秀句が産れ創れるが、そればかりに追い込む事は自殺的の句であり川柳の広い世界に差別をつけるようなものだ。借り着でも習慣による強制でなくて、平等観によるものなればゆるされてもよい、短冊や色紙や句碑になる句が、おのずとある事も忘れてはならない。

俳句のような川柳、川柳のような俳句、だが、俳句はやはり俳句であり、川柳は川柳でなければならぬ。似ているから柳俳無用論はまだ早過ぎる。人工衛星が出て、月や火星へ旅するようになるまで、地球上には世界聯合も成り、正しい東西両陣営が出来てからの事も知れない。

まだまだ、川柳界には幾等でも多くのものがある。お互に研究して考えねばならぬ。そして一歩一歩前進すべきである。



# 吉形苑女さんを訪ねて

(女流作家訪問記)

## 丸尾潮花

汐の香の漂うみどりの入江、油漆の様に美しい港の町、和気郡日生町に、大森娛句楽さんの愛娘、吉形苑女さんをお訪ね申し上げる。

ミシン、洋材店の奥まった一室に、テーブルを囲んで対座した苑女さんは、明るい感覚と生々とした若奥様でいられる。

「お忙しい処を突然お伺い申しまして」とお詫びを申上ると「潮花先生がお越し下さると父から連絡があったものですから、心待ちにお待ち申し上げていました」と明るく微笑をたたえられた。

「お店はお忙しいんでしょね」「え、朝、店を開けますと閉店までは何をする間もない位い、お蔭様で皆さんが私の店を利用して下さるので喜んでいきます」

「他にもこうした洋材店が有るんでしょね」「ええ御座居ますが私が洋裁の経験が有るものですから私の店でお

求め頂きました生地限りまして無料でお仕立をしてあげる様にしているものですから自然私の店の方を利用なさることになるんです」

「大変なサービスですね。それは夜分にもなさるんですか」「ええ、他にミシンを習いに来ていられる方もありますのでそうした事は店をしまいでしてからのことになるんです」

「御主人様は他にお務めでしょか」「いいえ、日立ミシンと洋裁用品を置いていますので主人はミシンの販売の方に当てていますので、仕入れまで一切私がして居ります」

「用材の仕入れにはどちらまでお出かけです」「大阪の本町へ参ります」「大変ですね」

「え、でも楽しみなんです。それに衣料ばかりの模範店会の売出

しや大祭の売出しが長期間続きますともう何をやる暇もなくなり、句も作る時間がないんですの」

「苑女さんの処女作をお伺いしましょうか」

「初めてのは(恋もなく月に千鳥の曲を弾く)だったでしょうか」

「苑女さんらしい美しい句ですね。苑女さんはお父さまの句についてどんな風にお考えでしょうか？」

「さあ、と一寸考えていられたが、

「父の句を評しますと着想が新しく、誰もが見つけない所を掴むのですけれど、表現が少し技巧過ぎる点があるのではないかと思ひます。父は昔俳諧をやっていたせいも有るのかも知りませんが、でも、もうすっかり川柳に溶け込んでしまった様で、最近はやが感じなくなりまして、やはり父らしい句と言う句は、スパッとしたり句よりも何だか廻り道をして帰る

様な句でないと父の句が感じられないのです。やはりそれが板についてしまつても申しますのでし

「お父様の句で苑女さんの一番好きだと思われまふ句は」

「そうですね(一級酒早や槍さびが出そうなり)でしょうか、父はお酒の句を作りますと、うまい様です。そして又ほんのりとお酒を飲んだら、いくらでも句が出るのですよ」

と特に娛句楽さんの句に関心を持つて毎月の句を見ていられる様である。

「川柳以外の御趣味は」

「川柳以外では静かに名曲を聞くことと、日本舞踊が大変好きなのです。父のそばに居ました頃、藤間流を習っていました、それも本当に覗いたと言う程度なんです。潮花先生がお近くに居られたら今からでも教えて頂くのにと申して居ます」

「再び川柳に戻りますけれど苑女さんのお好きな作家は」

「そうですね、霞乃奥様に次ぎまして豆秋さん、久米雄さん、春巢先生の句でしょね」

「女流作家の皆様から色々の批評も有りますが、肉体的な作品がいろいろあるを現代の世相からどの様にお考えになれますか」

「あまり感心したものだと思つて居ません。川柳塔にもそうした

作家の方がいられますが、毎月そうした句を見ますと「川雉」がこうした句で埋まる時が来たらと恐しくなる時がありましたけれど、最近はその句も少なくなりましてね。作家御自身もお考えになられたのでしょね。嬉しいと思つています」

全身に活力を！

カゴコロ

武田薬品

総合ビタミン剤

パンピタン

錠(30錠・100錠)ほかに液・末・M(ミネラル入)

# 一路集

## 告白

### 市場没食子選

告白の此処は刑事に当るふし 賀峰  
 傍聴の耳告白を逃さない 知恵美  
 告白は出来ず不安は日に募り 緑朗  
 失恋の告白友情飲み明かし 箔川  
 告白へ忘れましようと手を握り 文平  
 告白の嘘も上手に見抜かれる 秀三  
 小説のようねと告白からかわれ 五茶  
 告白をした目がきらり光つてた 栄男  
 告白へ慕情ほのかに募りくる 市郎  
 告白をあの手この手で調べあぐ 雄峰  
 告白をためらい月をほめており 一也  
 ありのまゝ告白させていぢらしく 龜庵  
 内幕を皆ブチまけて 遺稿  
 十年も前の罪まで告白し 白猫児  
 告白が少うし芝居がかつて居 立兒  
 告白を強いられた子の死の抗議 勝三  
 ワイシャツの紅へ告白あわてま 初甫  
 告白をした新世帯講が出来 王公  
 告白の一大嘘をさとらせず 三思樓  
 告白がむつかし過ぎる恋を知り 豊年  
 嫁かぬ氣の秘密を母に告白し とも子  
 告白も娘心の色をつけ 堯二  
 罪の道連れが欲しく告白し 春也  
 莫もう消して告白するつもり 代仕男  
 告白へ妻の返事はまだ小さき 操  
 告白の事件の相手は既に亡く 三六

告白を開いたその夜は寝つかず 古意知  
 真相を告げる言ひ方考える むじな  
 告白をしると仏間の灯が迫る 可十  
 告白をしても封建無理を強い 丸平  
 告白も出来ず病の床につき 古心  
 告白をかえつて父に諫められ 栄鴨  
 告白をしますに新夫ドキリとし 東岸子  
 告白をされて氣のつくことばかり 牧羊人  
 告白を忘れたまんま三十年 良坊  
 告白の涙婦警がふいてくれ 晴々  
 告白がそれ引込みがつかずなり 静觀堂  
 告白がぐつと縮めた恋の距離 夏生  
 職業意識はなれて告白聞いてや 閑人  
 皆許す顔で告白きいてやり 満秋  
 今でこそ告白すると笑い合ひ 愛論  
 告白は一日延びに日を算え 十悟  
 無性露なで告白ひまがいら 黄蛾  
 溜息をつき書いた告白書 藤波  
 凶に乗つて一ぶしじゅう告白し 夜潮  
 告白に男の好きな嘘を入れ 木魚  
 不利益な告白をして社を追われ 雄声  
 告白も出来ぬ善人死を選び 万古人  
 告白をさせてライバル慌て出し 万古  
 似たような告白を聞くマリア像 正郎  
 告白へ黙つて肩を抱いてやり 三林坊  
 告白を星のきれいな下でする 葉光  
 愛情の告白呆然と聞くばかり 光郎  
 災難として告白を葬る氣 光郎  
 告白の主はマダムとして儲け 不二  
 告白のこれも親分からの指示 高志  
 (佳)告白は今更生の世に目ざめ 十九平  
 (佳)告白をしようかペンに頼もうか 美舟  
 (佳)告白をすればフ、ンと云うたどけ 惠三朗  
 (佳)告白をしてあっさり辞表出し 圭水

## 配達

### 若本多久志選

牛乳配達来たら子供等が先に知り 高志  
 無免許で出た配達が気づかれ 春也  
 配達が遅れ臨終間に合わず 藤波  
 配達へ買物たのむ新家庭 良坊  
 配達も感づいている女文字 惠三朗  
 配達の日を確めて釣銭をとり 賀峰  
 オートバイ買えば配達行きなかり 木魚  
 配達のバイクは開いて開いて行き 英断  
 表札の愚痴をくどくど配達夫 十悟  
 新聞を配達する子美談秘め 勝三  
 配達は大きな夢へペタル踏み 立兒  
 配達をすませてからの朝の贈 三坊  
 配達へ礼も言いたい手紙くる 牧人  
 吉凶は知らず電報配達夫 葉光  
 自転車に乗れて配達行きたがり 天保鏡  
 配達夫こわれていようがおるまいが 香林  
 配達の油断自転車持つてかれ 五茶  
 稲刈へ配達声をかけて行き 万古人  
 (佳)信用はせぬが告白開いて置き 微醉  
 (佳)告白のつき来週この時間 貴美  
 (佳)老らくの告白そんなテレメ 兎風  
 (佳)告白のつき夕刊まだかいな 不二  
 (佳)妻の告白三十貫をあわてさせ 十九一  
 (佳)人生の終りすべてを告白し 不二郎  
 (佳)告白の特集を買い週刊紙 扇子仙  
 (人)告白をすることあるの酔わせてね 恒雄  
 (地)告白をされても旦那産めと言ひ 香林  
 (天)告白がすんで身軽な朝が明け 黒天子  
 (勅)告白の動機となつた内輪揉め 黒天子  
 配達はウナ電ばかりの年の暮 箔川  
 配達が大分おくれた草野球 雪峰  
 もう出たという配達にじらされる 三思樓  
 配達のここは朝寝の好きな家 東岸子  
 主人まで配達に出る十二月 微醉  
 配達費チャント算盤おいてあり 三六  
 配達に愛嬌そえて洗濯屋 雄声  
 配達が一息入れる飛行雲 不二  
 配達は派手な屋号でスクーター 正郎  
 デパートは配達軽く引受ける 初甫  
 電報の声に隣も灯をともし 貴美  
 配達も忘れて九回裏になり 一也  
 伴は肩書もなし配達夫 閑人  
 新聞を配達する子が級委員 閑人  
 配達夫恋のお使いとも知らず 徳市  
 配達が遅れ氣をもむ手付金 不二郎  
 配達もしたと社長の立志伝 圭水  
 配達と知つてセバート眼を細め 峰豊  
 合格の自信配達待ちつゞけ 古心  
 (佳)配達がチップ慾しそな汗を拭き 恒雄  
 (佳)配達夫吹雪の中の責任感 覚一  
 (佳)配達を頼む名刺へ地図も書き 十九平  
 (佳)配達が尋ねたKK二階借り むじな  
 (佳)父のない子で新聞を配達し 呆鴨  
 (佳)丁寧に配達されて粗品なり とも子  
 (佳)配達はしてくれ金は年の暮 古意知  
 (佳)配達へ仔猫の仲人頼んでる 秀三  
 (佳)魚屋の配達生きた声でくる 爽男  
 (佳)配達の米その辺へ置いときな 静觀堂  
 (人)配達が眉をひそめたみず文字 文平  
 (地)配達夫此家も秋刀魚だナと思ひ 光郎  
 (天)配達へ犬は一声義理で吠え 三林坊  
 (勅)三越の配達長屋へ知れ渡り 多久志



# 源頼政 (五)

高倉宮落馬  
橋合戦

## 富士野鞍馬

高倉の宮以仁王を迎えた園城寺(三井寺)では、宮を援けるため、比叡山の延暦寺と、奈良の興福寺へ、治承四年(一一八〇)五月十八日に、援助懇請の書状を送った。これを「山門牒状」「東都牒状」という。

山門——延暦寺——へは、既に、清盛から、米二万石、絹三千疋を贈って、手が廻っていたので、返牒はなかったが、興福寺からは、その二十一日に、宮を援けて与力するという返牒があった。これを「南都返牒」という。

延暦寺は、たのみにならぬと覚った頼政は、三井寺の僧兵と共に、早々、六波羅を夜襲する計画を立てたが、遅れて、夜が明けたので引返し、再考した。

れている。それを、江戸川柳作家は見逃がしていない。源三位夜食を喰って仕度する (万安八)

松明でやけどをさせる源三位 馬上ではおよびますなと源三位 (タル一五) (六二) 拙者が落ちると中氣だと頼政 (九六) 三井寺をのり出すと先づおちる (万安八)

等と頼政は気をつかい、口とりに身にしみおれと源三位 (タル五) 頼政に口取六度しかられる (六五) (八七) と馬の口取は叱られたであろう。

頼政に駕はなきやと御たずね (タル四五) 渡辺に駕はなきやと源三位 (百) 行軍に駕はおかしいが、駕がほしかったかも知れない。渡辺は、頼政の一類競等。

高倉は落馬しそうな御名也 (タル十) 高倉の宮さればこそ御落馬 (拾六) 牛に馬乗替宮は落給ふ (タル七二) 馬の尻持ったで宮は落馬をし (四二) 宮の落馬を川柳らしく作り、

## 不朽洞 会から

▼築山伏夢起氏(ホノル、市)は帰布后二ヶ月、漸く落着いたとお便りに接した。滞日当時の皆さんの好意を夫妻で反芻しては楽しんでるからよろしく伝えて欲しいとのこと、それに路郎先生の「川柳とは何か」が大変好評で殆んど売れてしまったからと追注文が来た。朗報東より来るである。

▼直原七面山氏(岡山県)は、岡山県警察本部の川柳どんぐり会に尽される外、岡山貯金局川柳会にも指導柳人の育成につとめられている由、石曾根民郎氏(松本市)主宰の、しなの川柳社は新年句会に「猿の顔百態」を句作、信陽新聞社の依頼により寄稿、一月二十七日の全紙を飾られた▼山田季贊氏(広島県)は一月上旬滋賀県へ帰省、正月の事として、春果理事長にも會わず帰広された▼阪田良坊博士(下関市)は、年末年始、呑む席が続く、漸く一月十六日の川雑下関支部初句会懇親會から小休止の由、要心しながら呑む酒も、また格別とのこと▼藤本満年氏(東京都)は、一月二十三日公用で伊豆へ旅行され、梅は勿論、彼岸桜が満開時ならぬ花見をされた様子、暖国情緒を味われ東京で大雪、二時間の距離に気候異変、「二時間の幅で花見と雪見なり」の旅信を寄せられた▼阪田良坊博士(下関市)は、一月二十三日、管内衛生状態視察に出張、大風と小雪の各地を巡回、「そのまゝに撮られてカメラを悪くい」の句信を寄せられた▼前山北海氏(ホノル、市)は、帰朝滞日中、不朽洞を訪問路郎師夫妻、梨里編集長に會われ、不朽洞の柳談「真髓を掴め」を執筆、柳誌「おかざき」に寄稿、その外、訪日記念句集「蛙の声」に集句百十一句を取録、在日最後の年の記念として関係方面に配布され、二月七日乗船米國ハワイ、ホノルル市北スクール街六一二ビロへ帰宅される由

▼理事長北川春果医博の勞を犒ぎらいかた、路郎先生夫妻は二月十二日生駒に遊ばれた▼橋本緑雨氏(大阪市)は一月二十九日午後一時から縁雨居で小集を催された▼正本水客氏(大阪市)は、旧冬永眠された母堂の忌明けの志を編輯部費の一部として金一封を寄贈された▼永田六童子氏(大阪市)の宅から西へ三軒目から一月二十二日出火一時は危険を感じ荷物も取纏める混雑ぶりだった▼尼絲之助氏(出雲市)は川雑支部中の最古参川雑出雲支部が、本年創設三十周年に該当、恰も市制実施十五周年記念につき、十月廿一日に記念川柳大会を開催することにになり、目下種々企画中の由▼福島鉄児氏(岡山県)愛嬢、二月二日岡山大学病院津田外科へ入院目下加療中の由、一日も早く御全快を祈る▼山田季贊氏(広島県)は、

その後、落馬の洒落に「高倉の宮」といったのか、

高倉の宮だと馬場ではなぶられ  
(タル 五)

高倉の宮だと馬場ではなぶって  
(拾 十)

と詠まれている。  
蟬折を宮六度まであけて見る  
(タル十一)

蟬折(せみおれ)は、宮の持  
っていた名笛ではあるが、そ  
の笛は、三井寺の金堂へ納め  
て、いま一本の「小枝」を腰  
にさしていたのである。この  
句は思いがいでであろう。

六度の落馬であるが、  
御落馬をいそがしい場をかぞ  
へて  
(拾 五)

六度目は茶の木の上へおっこ  
ちる  
(タル 五)

等と、茶の木で宇治をきかせ  
ている。  
七度目には矢を背負って落ち  
給ひ  
(傍 二)

宮は、平家軍に宇治で敗  
れ、三十騎ばかりで、奈良へ  
逃げる途、光明山の鳥居の前  
で、飛彈守景家の手勢四五百  
騎に追つかれ、雨の降るよう  
な矢にあい、脇腹を射られて  
落馬して、首を取られた。な  
るほど七度目の落馬である。

「平家物語」に  
「六波羅には「すはや宮こそ南  
都へ落ちさせ給ふなれ、おっか

けて討ち奉れや」とて、大將軍  
には、左兵衛督知盛、頭の中將  
重衡、薩摩守忠度、(中略)都  
合その勢二万八千余騎、木幡山  
うち越えて、宇治橋のつめにぞ  
おし寄せたる。」  
とあるように、平家の大軍が  
追って来て、八十三間の宇治  
橋をはさんで対陣した。高倉  
宮は平等院(西南岸半丁)に在  
り、頼政勢と三井寺勢は、宇  
治橋の三間(柱三本の間)ほど  
の橋板をはずしてそれに向っ  
た。

橋板は平等院へかつぎこみ  
(タル十六)

この橋板のないところを、  
三井寺の剛僧筒井浄妙は、長  
刀を持って走るように桁を渡  
って戦った。それをまた、跳  
り越えて戦った一來法師は、  
正に軽業以上のもので、それ  
が川柳になっている。

一往一來橋桁を飛あるき  
(タル十五)

一來法師北越の産と見え  
(カ二〇)

宇治橋で法師は敵を茶につま  
み  
(カ一五五)

どつとほめたりと一來法師い  
ひ  
(拾 五)

これを見た平家方は、水馬の  
名人、十七歳の足利又太郎忠  
綱の指揮に従い、馬筏を組ん  
で宇治川を渡った。この忠綱

は、依藤太秀卿十代の後胤と  
いい、齒の長さ一寸、声のき  
こえること十里といわれた怪  
青年で、この渡河に際し、大  
音声で終始水馬術の指導をし  
たという。

川越の指南忠綱つかまつり  
(タル十六)

口をすくしたと忠綱あとで云  
ひ  
(拾 五)

宇治川の水をたわらでせきと  
める  
(タル十八)

宇治川を鶴でいる顔の又太郎  
(武 十二)

さてよく喋る野郎と源三位  
忠綱はまた、田原又太郎とも  
称えた。こうして、三百騎が  
渡ったので、平軍はみなそれ  
にならって、南岸へ渡った。  
この時、平軍二万八千と「平  
語」にあるが、誇張のよう  
である。

この時平軍の流されたもの  
六百騎とあり、  
八十宇治川にものふの土左  
衛門  
(タル九)

宇治の網代にかかへてる木の  
葉武者  
等と詠まれている。この六百  
騎は、伊賀、伊勢の兵で、そ  
の中緋緘の鎧着た三人が、網  
代にひっかかったというの  
で、頼政の子仲綱は、  
伊勢武者はみな緋緘の鎧着て  
宇治の網代にかかりぬるか  
と詠じた。「平語」に書いて  
ある。しかし、この三人は助  
け合うて上った。

二月二日夕、国弘半休氏を訪問、  
久々の柳談に快をつくされた由  
▼佐野卜占氏(八代市)からの一  
月三十一日の消息で、当地はもう  
梅も既に散りかゝって、流石南国  
だなアと感ぜられるとの事、な  
お、同氏は、客臘十六日大和へ帰  
省され、再度三月十九日修学旅行  
に上阪されるので、路郎先生夫妻  
に逢える日を今から喜んで居られ  
るとのこと▼有働芳仙氏(熊本  
市)は、一月中旬から熊本市熊大  
病院第二外科に入院、加療中の  
由。一日も早く御全快を祈る▼黒  
川紫香氏(池田市)は二月四日か  
ら社用で広島、岡山、鳥取の各県  
へ出張されることになり、宮島か  
ら「朱に映えて宮島春の匂いす  
る」の句信を寄せられた▼内藤草  
一郎氏(ホノル、市)は内地の人  
も顔負けするほど熱心に毎月々々  
「川柳塔」へ出句されているが、  
最近路郎先生へ長文の書簡を寄せ  
られた一節に「早いものですねー  
私が川柳塔へ見参しましてより早  
や十年になります。毎月二十句宛  
を合計二千数百句に及びました。  
よくも続いた  
ものかなと自  
分ながら思わ  
れます。然し  
川柳は古いか  
らとてなか  
くに進境を  
示すものでな  
いことをしみ  
んく感ぜさせ  
られてます」と述べていら  
れる。▼一月  
二十七日の常

任理事会へ不朽洞会の会費の値上  
げが提案されたので種々協議の結  
果、各種別とも一律に月二〇円値  
上げすることが認められたので御  
諒承ありがたい。▼谷内一草、福本  
剛骨、飯島二桂、岩島雄歩、尾野  
おさむの各氏は、一月限、臼井吞  
風氏は二月限何れも家庭の都合で  
退会された  
(摩)

新会員紹介  
二月

小倉へとち(神戸市)正  
緑之助氏推薦

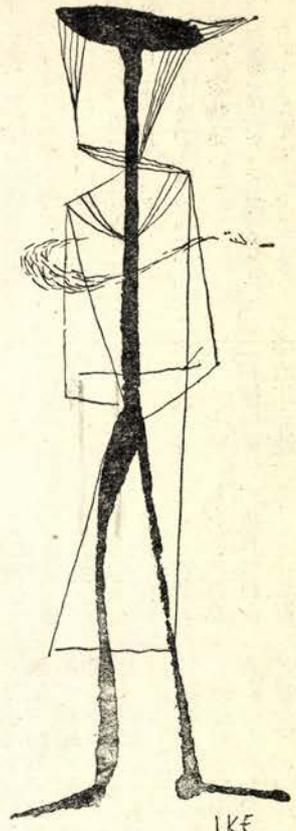
早川野甫(大阪市)正  
香林氏推薦

武部若菜(大阪市)正  
腹乃女史推薦

伊藤茶仏(小松市)正  
吉岡草白(大阪市)正  
西出一栄(大阪市)正  
酒田清子(大阪市)正  
和田登志子(大阪市)正  
平井井平(大阪市)正  
寺本貞旬朗(大阪市)正

以上白柳子氏推薦

O.S.K. レイクード  
大坂商店  
大阪府東区南船場一丁目三番地  
電話(94) 1745 1563



秋春筆雜

文字の遊戯と  
駄洒落漫談

池沢白翁居

「三十一の年のはじめに言葉の榮  
え行く世を先づ祈らばや」  
観心寺の如意輪観音の遭難を  
観音もこんな男にゃ手を焼いた  
定めし類句あるべし。

こんど「東田舎」と蜀山人の額を  
かけた京の寓居積廻谷から大阪に  
戻り「善意ホーム」というのを作  
ろうとしたら小林「二三さんから  
「善意芳夢」と揮毫して下され  
た。

小林はコマ劇場が死土産  
など云われているがナカ／＼  
空空八十一と洒落たる逸翁は四  
となりぬれど不死の面影  
昨年秋の秋山市郊外にある本邦  
長寿の代表武内宿称の誕生地をた  
ずねてその産井をのぞいて見た  
歴史にもこんな男は宿称井戸  
武内宿称の一円札は失くなって一  
万円札が出るやら

一万田一万円札よい記念

年賀状に香里園の女婿の宅で越年  
したと書いていたら十日も立たぬ  
新春早々、堺市三国丘の方違神社  
のほとりにねぐらを見つけそれを  
求めて白翁居ができた。三国丘は  
摂河泉三国の辻にあたり、神功皇  
后が三韓征伐から帰って忍熊王の  
叛乱を平げるだけ方位除けを祈っ  
た神様じゃ

方除けの神は真ん中に坐し給う  
去年遠州の秋葉山三尺坊に参った  
ら本殿火災再建の瓦の寄進をすす  
めていた

火の用心火伏せの神も焼け給い  
こんど三国丘に来たので新しい  
ペンネームがまた一つできた。

「丘下髯叟」じゃ。わしは日露戦  
争にも行った老兵だ。丘下に八の  
意味じゃ。同じ筆法で、白翁とは  
百から一を引いた九十九の欲張り  
になる。もとは楽居だったが、そ  
れは住吉に菖蒲園のあった頃、麻  
生君の川柳のつどいに出席して、  
その時誘ってくれたのは南海電鉄  
の同僚岩田五郎君。もう故人にな

つた色が浅黒くて「ゴボウ」と  
称していたので、わしはすこし青  
白かったから「ラッキョ」にし  
た。あとから雅号の意味を人から  
聞かれて、皮をむいてもむいても  
中味がない意味だと答えたことも  
あるが、実際は煮ても焼いても食  
えぬ横着者だった。

ペンネームのことをいえば、麻生  
路郎は「朝顔日記」の色男を思わ  
せる。わしとの関係は大正日日新  
聞じゃが、あの新聞は朝日の主筆  
鳥井素川が創立したもので、大本  
教が買って第一回大事件で潰れ  
て寿屋の鳥井さんが残骸を引受け  
られた。

鳥井から鳥井を潜りサントリー  
その時麻生君は経済部長だった。  
その後堺市民病院の事務長だっ  
たこともある。院長はむつかしや  
の金井博士、ある時わしが南海に  
いると給仕が奥様から電話だとい  
ふ、うちの家内かと思っ出たら  
金井博士のカナイだった。

南海にストライキが起って一同  
が高野山に登った時、切崩しが成

功してみな下山したその時の電  
報、  
ミナゲサンシタコゴゴブジ  
「今後無事」とはよい辻占でおさ  
まった。

大阪の商人に阿部幸兵衛というの  
があった。アベコベによんでも同  
じ歌を、わしは明治神宮で二首ま  
でさぶかった。一つは般若心経二  
百六十二字を三十一字にした歌  
ながむればくすしかずかずたま  
のまのまたすがすがしすくはれ  
むかな

一つは右の歌を授かった時の光  
景  
白雲や宮の夜に得し言の葉のと  
こしえに世の闇や消ゆらし  
麻生君の川柳も宗教だが、わしの  
歌も宗教だ。  
宿称井にサニワみ祖を偲びつつ  
行手のぞめばわが道還し

わしは一生宗教と取組むだろう。  
(筆者・堺市南田出井町四十七番六)

当世あべこべ集

長野 文庫

時々かまぼこ屋へかまぼこを買  
いに行くが、いくら買っても(二  
十本も三十本も買っても)一本も  
添えても呉れず、たゞの一円も負  
けて呉れない。この間急に入用が  
出来たので電話をかけて持って来  
させたら、合計八百七十五円の処  
八百五十円に負けてくれた、そこ  
で「店頭で買より手間がかかり

面倒なのに持って来て貰う方が安  
いのはどう云う話だ」と尋ねて見  
たら「お宅へ特にサービス致して  
おきます」と云ったが、このサー  
ビスはアベコベではあるまいか。  
買いに行くお客の方が馬鹿に  
され

何時も立寄ってよく現金で買っ  
て居る店からは盆が来ても正月が  
来ても何一つ贈り物が来ない。  
百円に一枚と云うくじ引券すら素  
知らぬ顔をして呉れなかつたりす  
るが、掛け売をして居る店からは  
盆に手拭、暮にカレンダーをくれ  
る上、子供を連れて行つたらキャ  
ラメルを呉れたりするが、これも  
可笑しな話である。  
私わないお客の方を優待し

或る人の葬儀に参列して謹んで  
焼香して戻ったが、丁度持ち合せ  
て居なかつたので名刺は置かなか  
った。名乗る程のこともないので  
黙って帰ったのだが、儀礼を尽し  
たのだから何も後暗いことはない  
が、勿論会葬の礼状は来なかつた。  
近所のX氏は葬儀には参列し  
なかつたが知人に名刺を渡して名  
刺受へ入れて貰った所、やがて丁  
重な会葬御礼状が来たそらだ、聊  
かクスグったかったに違いない。  
名刺受けとも知らないで御禮  
状  
相変らず散髪屋へお歳暮の祝儀

を出すが居るらしく、散髪屋ではその祝儀袋を店内に貼りつけて居るが何となく祝儀の催促がましい、私は反対にお歳暮は客の方が貰い度いと思うが如何。

催促のように祝儀を並べたて

地位が高くなつても少しも高ぶらず相変らず丁重な賀状を寄越す人、市参議員に当選しても暑中見舞や年賀状を欠かさぬ人もある一方、利用価値が無いと見たら鼻もひっかけぬ男も居る。「おれ、貴様」だった一人が大そう偉くなつたのは嬉しいが、最近とんと寄りつかず賀状の一本も寄越さなくなつたのは甚だ淋しい、だが友よ氣をつけろよ、地位がぐらつくのは足元からだぞ。

石垣まぐらつかせたは蟻の穴

### 御縁

#### 酒井ひか平

昭和十二年頃大阪「みなみ」の喫茶店や、おこのみ焼屋で四人の漫画家の卵がよくテーブルを囲んで青雲の夢を語つて居た。

その四人が、不思議な事に、何らかの形で「川柳雑誌」のお世話になり、路郎師の御恩を頂いて居るのであるが、縁と云うのだからか。

北みきを君なら、師の句集「旅入」の中にも一句ある様に川柳の古い方なら御存知の筈であり、竹

中アキラ君の名前も一月号の「私の顔」のアンケートで、往時の腕前の一端が語られて居る。

種瓜平君は現在東京へ移転されたそうだが漫画家の初志を貫かれて居り、川柳人としても名声を博された。

一人欠けて居た私が、十五年も経つてから、又しても師の御恩を頂く御縁につながつて来たのである。

縁は異なるもの。よく「あきら」君が路郎先生のお話しをしたものである。

先生に、ロンドンさんと云うお

名前のお子さんがあつた話しを聞いた時の事を、私はよく覚えて居る。「そんなだつたから軍の風当りが強いだろうね」と僕は心配をした。

### ぜんざい屋と酒屋

#### 八木摩太郎

今は故人となられた由だが、戦争に行つたみきを君もどうして居るだろうと思ひ、竹中アキラ君もどうして居るのかと懐しく思う。

大阪に居た瓜平さんとも逢わず仕舞になつたが、一番川柳に縁が薄い様であつた私が最後に笑う男になろうとして居る事である。

それにしても昭和十二年頃の

鳥の内の灯が今だに懐しいし忘れられない。

### 八木摩太郎

#### 酒所跡の、堺市旧庁舎は、戦災の為に、今は消え去つたとは云え、明治二十五年の頃の建築として、モダンなものであつた。しかし、時代の推移で腐蝕し、よくもこんな処で、執務して居るナアと、あぶながられる程の廢屋であ

「堺の市役所は見るからに廢屋の觀がある。廢屋と云つてもギリシヤやローマのそれとは似ても似つかぬ灰色の憂鬱さである。建直しの声もないではないが、それもかけ声ばかりで、い

## 同舟近詠

松山市 前田 伍健

政界の別なざわめき緒方の死  
村豊か浄るり師匠雇いきり  
味もない活字のはがき選筆前  
原稿紙の音もマイクは逃さない

金沢市 安川 久留美

冬の滝つららも光る不動尊  
十露盤の音をはなれて早春を知る

岐阜市 東野 大八

心なく義手を包んだ新聞紙  
端然と御仏の掌に義手は似て  
義手つけて出ればけんかしたく  
義手置けばこれがわが手か鉄と皮  
義手前に寒々として冬に坐す

長野県 高峰 柳児

豊作の雑煮値に触れ味に触れ  
ただ達者取柄に表彰されて居る  
飲む日取卓上日記に続いて居

今治市 長野 文庫

長男の野心が母を驚かせ  
私大でもよいと父親諦める  
茶柱も当にならぬ借手が来  
借りて居る方八月日の早いこと  
本ものの自動車で来る知事代理

和歌山県 秋 月 宏 方

働こう冬眠出来ぬ人間だ  
欠損をしても算盤無表情  
不甲斐ない男で遂に終りそう  
大阪市 石 田 沐 天  
M 過剩春まんだらに化粧して  
春の女容号めいた顔になり  
お神楽もテープブロードで一つあげ

大阪でなんとかならず死にもせず  
からつぱの頭にすぎたデスクなり  
迂廻した街でも酒の匂いして  
停年も晴耕雨読の柄でなし

門司市 菊川 泰平 楽

ボディビル猫も杓子も見構える  
生きて華咲かず死んでも花輪なく  
四国から遍露に來いと誘う友  
物やれば天を拝して乞食いに  
赤い陽の沈む海峡今日も無事

国立公園指定

観なれたる海峡なれど格がつき  
駅伝の雨泥ンコで飛び込みぬ  
こんにやくのように赤ん坊たわいぞ  
大洲市 米 沢 曉 明  
大マッチかかえ焚火はまだ燃えす  
雪という声にも少し寝るとする  
お女中の方が良妻賢母型  
長靴の堂々と行く水溜り

# 金泥集

## 廬生 葭乃選

### 課題「茶漬」

茄子漬の艶に茶漬の箸はずむ  
 さしむかい囁み沢庵に気がひける  
 お茶漬けのお茶さねるい妻の留守  
 お茶漬けに妻の自慢のお漬物  
 胃の弱い母に茶漬をとめる子等  
 お茶漬の音騒々し子沢山  
 帰還して茶漬の味に出る涙  
 お茶漬の客に一本つけて出し  
 山海の珍味もあとは茶漬欲し

民子 すぐきをば賞めて茶漬のお代りし  
 芙蓉 鯛茶よりお昆布でさうり差し向い  
 千永 食慾がなくてお茶漬流しこみ  
 都詩子 妻のいない夜は茶漬ですましとき  
 香月 叱られたのでお茶漬でブイ立ち  
 すみ代 お茶漬も芝居帰りは別な味  
 千枝子 お茶漬に玉露をかけて胃散過多  
 清子 行商へ麦飯茶漬喜ばれ  
 一栄 お茶漬で落ます積りへ客の声  
 茶漬ならいらぬと蒲団からの声

糸潮 お茶漬へ小鳥が春を告げに来る  
 阿茶 お茶漬を食べても知らぬ宿酔  
 奈良子 茶漬浴んだ頃隣からワザビ漬  
 白香 繁昌の台所立ったまま茶漬  
 とし子 終止符をうつかの様に茶漬が出  
 花鶴美 お茶漬にするものがない宿の膳  
 徳子 肩掛のまま茶漬を喰べて去に  
 若菜 お茶漬でなぞと刺身が膳に付き  
 有子 断台の上で茶漬の風がすみ  
 梨花 ぜいたくな口が揃うている鯛茶  
 たつよ 同  
 花代子 同

知恵美 富士子 同  
 きさ子 同  
 同 同  
 同 同  
 同 同  
 同 同  
 同 同

つになつた新時代のシテイ  
 オフィスらしくなることやら今  
 のところでは、とんと見当もつ  
 きかねる。  
 建物がそれであるから、お役  
 人と云うお役人が何れも、古色  
 蒼然とした前世紀の遺物である  
 かと云えばさし非ず、頗るモデ  
 ンな若手連中お云はずもがな正  
 真正銘の大学出もいる。それに  
 配するに紅何点かの美しい女給  
 仕やモン／＼嬢もいる。  
 更に絵筆に親しんで情操の豊  
 さを誇らんとする人々もいる。  
 私の半身が事務長となつて間も  
 なく社会課のY君がひき出し  
 原稿の一綴りを出して、  
 「これを出版したいと思ってい  
 るのですが、序文を書いていた  
 けませんか」とのことであつ  
 た。  
 一読するまでもなくそれが歌  
 集であることは判つたが、

「歌集の序文を私に書け」とい  
 うのは、いさゝかおかしい、人  
 間違いではあるまいかと思つて  
 Y君の顔を見ると、先方は案外  
 真面目である。  
 で、私もその熱心にほだされ  
 て、  
 「私でよければ」と云つてすぐ  
 にうけ合つてしまつた。  
 頼む人も頼む人なら請合ふ人  
 も請合ふ人である。ぜんざいや  
 が酒屋に序文を書かそうとして  
 いるようで、この歌人、よほど  
 の変り者に違ひないと思つた。  
 しかし、市役所の中に早稲田を  
 出たという歌人、均クンが一人や  
 二人いたとして別に不思議はない  
 筈だ。歌人晶子女史をうんだ堺  
 市のことであるから、この均ク  
 ンの処女歌集に私は次のような  
 序文を書いた。

ぜんざい屋の提灯持を酒屋が  
 したような序文というのは斯う  
 ある。(この序文は本誌の三  
 一九号に掲載したことがあるの  
 で略す)  
 仕事の関係だけでなくこんな  
 ことから、均クンと私とは殊に  
 親しくなつた。遂には市役所で  
 出来た川柳会の世話方まで引受  
 け、彼自身も盛に駄句りはじめ  
 た。  
 各課の人々は勿論、市議の居  
 谷一柳先生までが乗出して作句  
 に熱中されている。今に川柳詩  
 人の堺市が出現するかも知れな  
 い。  
 (泉州日々新報 昭和六年十二月)

右の随筆の中の均クンと書かれ  
 ているのが今日の私、摩天郎であ  
 る。  
 その頃の議員協議会室に、当て  
 られた川柳句会は、中々の盛況で  
 あつた。今は市長である河盛氏が  
 名議長として、名を馳せていら  
 れた。戯蝶と云う雅号で、一柳先生に  
 誘われてこられたのも思ひ出の一  
 つである。路郎先生の居られた堺  
 市立公民病院こそは、大阪の市民  
 病院に先きがける事二三年前の創  
 立で、全国に、嚆矢として社会事  
 業の病院であつたけれど、創立当  
 時とて、多難な経営であつた事も  
 今は滄桑の感が深い。  
 院長自らが、市会へ乗り出して  
 答弁之れつとめ、熱しては独乙語  
 まじりで、苦境を逃れた。堺の医  
 師会長を始め、二三の医師も、そ  
 の議席を有し、大阪市の助役であ  
 った人迄が、議席をもつて、波瀾  
 のような政争の激しい時ではあつ  
 たが、矢面に立つた、川柳詩人の  
 路郎先生の答弁は、敵も、味方  
 も、等しく耳を傾けさせた。新聞  
 記者の猛攻撃も、談笑のうち、十  
 一蹴されて帰る人が多かつた。十  
 数紙を数える新聞社も、その道の

先輩であり、川柳に徹した人でな  
 ければ斯うは行くまいと思わしめ  
 た。間もなく、他都市にも、そ  
 の地方の医師会の反対を押切つ  
 て、実費診療の病院が設立せら  
 れ、その名も堺その儘に、公民病  
 院としてデビューされたのも思ひ出  
 である。時は流れて、二十五年、  
 思ひ出はかなし廊下の長さ  
 にも  
 は、路郎先生がその当時を回想さ  
 れた句かも知れない。水色の洋館  
 建の同病院は、未来永劫、私の忘  
 れる事の出来ない思ひ出である。  
 又その頃に植付けられた僕の川柳  
 は、遅々として顧みて道なお遠し  
 の感があり、慚愧に堪えないこと  
 ろである。

**沖野岩三郎氏を悼む**  
 川柳雑誌社社友として又川柳不  
 朽洞会の洞友として多年「川柳雑  
 誌」を支援された沖野岩三郎氏が  
 一月三十一日午前九時十一分に長  
 野県軽井沢町千ヶ滝の自宅で心臓  
 衰弱のため永眠された。享年八十  
 歳。氏が新宮で牧師をされている  
 頃、幸徳秋水事件で交友の殆んど  
 が捕えられたが、氏は酒をたしな  
 まぬので、その席に招かれなかつ  
 たので難をのがれ、後、小説「宿  
 命」を書き朝日新聞の懸賞小説に  
 当選、その後作家となられたので  
 ある。謹んで悼む。

# 老地柳壇

投稿規定  
▼用紙は原稿用紙▼文字は正  
確▼締切毎月二〇日▼投稿先  
本社宛

## 本社新春川柳大會 (大阪市)

一月八日 於 光明寺

十日夜の宵宮を明日に控えた新春らしい  
霧閉気の本社新春句会は、鳥取市から  
大西八歩、河村日満、杉谷湖山、増田耕  
民の諸氏、岡山からは浜田久米雄、土井雷  
山の両氏、篠山からは出口白猫児氏が来  
会されて大盛況であった。西尾葉氏の理  
事長代理の挨拶に次いで、路郎師の柳話  
作句は苦しんですべきである。そこに個  
性ある句が生れるのであると説かれた。  
続いて昭和三十年に不朽洞杯の三回連  
続優勝者がなかつたので、決戦を行うこ  
ととなり、特別課題「乾杯」で一分間競  
吟に移る。決戦参加者は昨年一ヶ年間の  
各題天位の入選者で、氏名次の通り。

没食子・与呂志・葉光・文蝶・丁路・  
都詩子・賀峰・梅里・香林・白水・淡  
舟・阿茶・雅堂・多久志・一朗・十悟・  
省三・喜好・水客・芳川・正斗・梨花・  
文秋・一三夫・恒明・万葉・玲人・一  
十・凡九郎・雄声・潮花・白柳子・梅

志・六童子・須賀太・いさむ・前記の諸  
氏奮闘の結果優勝杯は正本水客氏が獲得  
するところとなった。恒例の新春の呼物  
である柳人の余興は梅志、賀峰両氏の素  
謡、賀峰氏の仕舞、貞句朗氏の即興狂  
言、潮花氏の舞踊長唄「七福神」に続い  
て生々庵博士のテープレコードから洩れ  
る常任理事の忘年会風景の公開は爆笑、  
哄笑、の初笑いに大いに句会を和やかに  
させた。紅白句戦の後、兼席題の披露に  
入り、遂に当夜の不朽洞優勝カップは本  
年のトップを切つて金井文秋氏が把握し  
た。時に午後五時。散会後有志の新年宴  
会を割烹「大方」で開かれ歓をつくし  
た。

(摩)

出席者 路郎・摩太郎・白猫児・悟  
郎・玲人・葉香・いさむ・喜好・須賀太・  
耕民・湖山・梅志・八歩・省三・葉光・  
賀峰・淡舟・狂二・沐天・角嵐・蜂呂・  
雄声・文蝶・都詩子・ひろし・香林・生  
々庵・進之助・黄蛾・雅堂・文秋・薫風  
子・一十・清潮・日満・喜仙・十悟・  
一三夫・正斗・久米雄・雷山・玄武洞・  
万葉・葉・梨花・花香・梅里・多久志・  
丁路・屢氣楼・寄与史・阿茶・水客・煙  
司・六童子・貞句朗・繁雄・みのる・東  
洋男・天真・愛論・照子・一朗・秀夫・  
芳川・峰春・立兒・恒明・白水・旅風・  
潮花・貴洲・没食子・清花・凡九郎・へ  
とち・旋月・いわを・水茶・白柳子・武  
助・与呂志・竹荘・葎乃・梨里

## 本社新年句會 (大阪市)

一月八日 於 光明寺

昭和三十年度不朽洞盃争奪決戦

他人さんの為めの乾盃ばかりして 水客  
兼題「晴着」 中島生々庵選

他人様の晴着を縫うて初春を待ち 凡九郎  
たまさかの晴着が露地の噂撒き 梨花  
橋筋へ妻の晴着が時代めき 雅堂  
晴着五人見送つて母餅を焼く 万葉  
同じ事なら晴着で出かけ驚かせ 白柳子  
グラビアの晴着一月前に笑み 立兒  
晴着今日日本一の胸をはり 寄与史  
おみそれをされた晴着へ云いわりし 梨花  
晴着とは名ばかり姉の染直し 淀月  
晴着がらもやけの手を引つ込ませ 久米雄  
初春の晴着の町に越後獅子 貞句朗  
人形に晴着を着せて病んで居り 薫風子  
流行を追える晴着のお倅せ 56の猿  
晴着きて仏間の母へ礼を云い 愛論  
天然色のカメラが慾しい晴着きて 十悟  
除夜の鐘聞いて晴着が縫いあがり ひろし  
焼芋の湯気を晴着の袖に入れ 一乃字  
舞初めの晴着の袖がつくる風 水客  
表彰へつぎの当つた晴れ着立ち 喜好  
靴磨き今日は晴着で初仕事 多久志  
着飾つた娘へ玄関を開けてやり 須賀太  
挨拶は後へ廻して晴着ほめ 丁路  
花嫁の晴着早速偵踏みされ 同  
足袋だけを替え正月の晴着です 水客  
晴着かけた屏風重さに堪えてい。梅志  
たいていやないな晴着をがらめられ 文秋

歌留多読む妻の晴着をよこに見る 生々庵  
兼題「住込み」 清水白柳子選

住込みはいつも寢床で喰べる癖 多久志  
住込みに山越して行く次男坊 黄蛾  
住込みの女へ小うるさい噂 十悟  
三階の隅で住込み本を読み 香林  
住込みで女中へこびる手も覚え 生々庵  
住込みが中二階から起きて来る 省三  
住込みがうすい蒲団を担いで来 同  
住込みへも賀状二三葉届き 薫風子  
住込みはお国訛りでよく笑い 東洋男  
住込みは風呂の帰りに中華そば ひろし  
寝入りばな起し住込み走らされ 梅里  
住込みの長崎弁が人気者 淀月  
住込みのこゝの立場もちとわかり 湖山  
住込みのつい云わでもの事によれ 凡九郎  
住込みで機械にも似た日を送り 梨花  
おしきせを着た住込みの公休日 照子  
子沢山長女住込みなどと云い 与呂志  
住込みに余生を送る不仕合せ 同  
またしても住込み手紙書いている 紫香  
住込みを志望は親のない子供 一十  
住込みは女中の次に目をさまし 花  
住込みの店員ねんねも着せられる 喜好  
住込んで速者で居るさだけ知らせ 煙司  
住込みがさざれに聞く夫婦喧嘩 一乃字  
住込んで五年養子に望まれる 万葉  
住込みの又顔合わす仕舞風呂 梨花  
住込んで当分逢はぬことに決め 煙司  
住込みで6と必死の顔を上げ 立兒  
住込んで結婚資金だけ儲け 没食子  
住込みはだら／＼と使われる 梅里  
住込みへ来た郵便は皆で読み 一乃字

住込みへ小鳥の世話も頼んで出 知恵美  
 優遇をしても住込み愚痴があり 文 秋  
 住込みの柳行李が先きに着き 煙 司  
 住込みの弟子に奥伝真近なり 万 案  
 三ヶ日住込みどこへ行つたやら 貞 旬  
 住込みは親を病気にして休み 多 久  
 住込みの希望を乗せた炭坑の駅 雅 堂  
 内緒だんねんがと住込みからも 凡 九  
 住込みになつて不器用な針も 愛 論  
 住込みの墨瓶水道が止らない 水 客  
 住込んだ当座倉庫が気味悪く 阿 茶  
 天井が病む住込へのしかり 司 柳  
 住込みへ同じなまりが一人増え 水 茶  
 兼題「誘惑」 松江梅里選

誘惑を振り切り雨の夜を帰えり 白 水  
 誘惑をして欲しい人がしてくれず 雄 声  
 誘惑の右も左も紅い口 いわを  
 誘惑をして誘惑をされた酒 寄 与  
 ちよつと誘惑した脂肪過多 56の猿  
 誘惑をアツサリ蹴つた終電車 省 三  
 誘惑にボケットマネー先ず教え ひろし  
 誘惑の一步手前で金が切れ 雅 堂  
 誘惑の言葉がのどでひつかり 潮 花  
 誘惑に負けまじんでたお月さま 立 見  
 誘惑をされたげるお惚れて居り 文 秋  
 誘惑と知らず大阪弁の親切さ 56の猿  
 誘惑のあの夜の霧が震えてた 玄 武  
 誘惑に勝つて綺麗な星と居る 聖 柳  
 誘惑に負ける若さをうらやまれ 八 歩  
 誘惑に負けた廓の朝を出る 白 水  
 誘惑に負けて寝返りうつている 黄 蛾  
 襟脚にひきつけられた素直 栗  
 誘惑の酒意識して坐る宵 香 林  
 誘惑を覚悟の上で秘書になり 日 満  
 三枚目ふと誘惑にひつかり 水 茶  
 誘惑を逃れるだけの恋をもち 知 恵  
 兼題「鯛」 土井文蝶選

余生送るように水族館の鯛 薫 風  
 罪もない鯛を一網打尽にし 貞 旬  
 めでたい日貧とは別な鯛の色 十 悟  
 除夜の鐘お台所で鯛も聞き 八 歩  
 にも鯛猫はちゃんちも可笑しく見 一 三  
 元且試筆芽出度鯛がはね初め 生 々  
 兼題「俵」 市場没食子選

腹の別の愛想を軽くうけ流し 梨 花  
 腹割つて見せたいと云う真剣さ 一 十  
 鄭重な言葉で腹を探り合い 丁 路  
 腹を割つて話せと昔馴染なり いわを  
 腹黒い方がやさしく云うてくれ 白 水  
 兼題「長生き」 八木摩天郎選

誘惑をしたりされたり忙しい 丁 路  
 誘惑の手のつめたさを払いのけ 久 米  
 ウチ誘惑したんねんと孕まされ 一 三  
 誘惑を承知でついで行く度胸 白 水  
 誘惑に勝つて戻つた靴の音 蜂 呂  
 誘惑の朝を悔いでいるコンバクト 愛 論  
 誘惑を待つて様なたーミナル 水 茶  
 誘惑をされた同志がのんでおり 阿 茶  
 誘惑に別な挨拶してしまい 寄 与  
 誘惑のポトワインに酔いほむ 角 嵐  
 ソフトクリーム誘惑されるは知らず ひろし

組にのつても鯛の目は光り 芳 川  
 鯛網へ芸妓も交る観光課 進 之  
 鯛の尾は真直ぐに天を指し 水 客  
 鯛はまだクインであつた色で居る 湖 山  
 にらみ鯛お酒を呑まぬ客ばかり 恒 明  
 門幕の中から鯛を焼く匂い 淡 舟  
 三ヶ日おんなじ鯛が膳に乗り 花 香  
 食卓の鯛見比べて席につき 一 三  
 千代八千代祝詞は鯛に突きあたり 蜂 呂

腹が出来た男で借金王となり 生 々  
 腹違いまだ顔知らぬ姉があり 煙 司  
 腹立て、帰れば妻の薄化粧 多 久  
 腹にない言葉で生きて居る妓 十 悟  
 腹からの悪人でない酒の愚痴 雷 山  
 初風呂で肩流させた太っ腹 芳 川  
 腹芸と腹芸いまだ呑みたら 湖 山  
 三枚舌使える腹が出来て貯め 蟹 気  
 失敗を社長の腹で救われる 同  
 叱らない課長に腹をみすかされ 賀 峰

美人揃いと宣伝車町を行く 清 潮  
 コントロール自称美人が寄つて 十 悟  
 アトラクション美人拍手の中に立ち 文 蝶  
 美粧院何うでも美人の顔にする 六 竜  
 うねはれの強い美人で持て、居る いさむ  
 神様も別賞だけは籠に乗せ 進 之  
 美人と云う名で田舎に落ち付け 六 竜  
 美人ちと鼻にかゝつた声を出し 淡 舟  
 人形のように美人は笑はない 寄 与  
 奥さんは美人ですと無心に来 喜 好

許嫁来る日美人画脱しとき 東洋男  
スキャンダルは美人でないにもち 日満  
美人あり酒あり若き旅日記 蜂 呂  
冷たさを美人の鼻の先に知り 八歩

席題「財産」

浜田久米雄選

財産があるとわかつて惚れてくれ 喜 好  
財産が目当てと養子云わぬなり 愛 論  
財産があるので女だまされた 文 蝶  
財産が目当てで兄兄弟のハトコと 香 林  
財産のこともちよつぱりふれて置き 東洋男  
財産をながめて旨い物喰わず 文 秋  
財産とニラミッコして見合する 愛 論  
五十年やと一軒家を建て 須賀太  
財産がなくて手帳に恋が出来 立 兄  
一財産すつた美声を聞かされる 雅 堂  
財産の手押車の中でねる 悟 郎  
当方財産なし嫁の来てもなし 峰 春  
雑草に財産別けの枕をうち 喜 好  
一財産造る気大阪弁に馴れ 八 歩  
財産があつたばかりの不倅せ 久米雄  
席題「ひげ」 西尾 栗選

盆栽の愛するひげにある孤独 葉 光  
先代のひげが客間をひきしめる 賀 峰  
しけて来て船長のひげたのもし 生々庵

川 淀川支部句会 (大阪市)

武部香林報

今年こそ覚悟くづる、三ヶ日 近 藤  
出るとこもなく平常齋の三ヶ日 多久志  
三ヶ日おんなじ鯛が膳に乗り 東洋男  
三ヶ日質屋も国旗ひるがえり 花 村  
もう一寸延期をしたい三ヶ日 若 菜  
気兼ねなく朝から酔える三ヶ日 水 堂  
三ヶ日だけは素直な妻になり 同  
おごそかに神主様ぐ三ヶ日 花 村  
三ヶ日二日は汽車の内で消え 水 茶  
帰れとは云わず炭火も消えなま 花 村  
炭の火のほてりばかりでない話 文 児  
紙袋の木炭でよし新世帯 山茶花  
末っ子の書初め皆にとりまかれ 多久志  
ほろ酔を機会に上役影を消し 札 司

川 堺支部句会 (堺市)

八木摩太郎報

監査課も欲しいと思ふ交際費 貴 山  
橋筋できれいにのびた交際費 春 翠  
株主につり込まれている交際費 好 郎  
交際費二割削ってほしい妻 左久良  
修繕屋一度は全部潰して見 狂 二  
修繕に来て新品をすゝめられ 左久良  
酔ざめの水を豚箱くれもせず 貴 山  
手不足をよそに旦那は朝の風呂 玲 人  
手不足の帳場の電話鳴りつき 好 郎  
たよりないけれど隣へ留守頼み 圭 水  
お隣のこまめを妻はほめちぎり 好 郎

修繕を片付けてからめしにする 玲 人  
修繕の釘も効かない程使い 左久良  
家賃だけとって修繕聞き流し 摩天郎

川 鳥取支部句会 (鳥取市)

大西八歩報

標準語があるに方言省かれず 敬 一  
子が学校へ行くのを国旗を思い出し 法泉子  
女性美を負けてきたかボデイビル 粗 粒  
久し振りに出した国旗のしみのあこ 多可志  
古里へ錦をかざる子の決意 淑 惠  
意地悪の子が省かれて母へ来る 素 飄  
旧仮名にすれば電文また省け 幸  
探検のように貸家をのぞきこみ 喬 水  
年賀状どれも省けぬとこばかり 茗 人  
前文省略金を頼むと子の便り 遊 星  
省いてた人から来てる年賀状 三 歩  
省くだけ省きがちりした生活 耕 民  
寄せ書の国旗で征つた子の空し 湖 山  
出張の報告六分程省き 日 満  
秀才と云う型でなしボデイビル 八 歩

川 下関支部句会 (下関市)

石川侃流洞報

待合所同じバッヂがよく喋り 雪 夫  
臨時車が積み残したる秋日和 妻揚子  
お詰め願ひマウスと車掌の下り 六 花  
白菜の土の香一皮むいて売り 吞喜坊  
ペンキ屋の肩にめり込む長梯子 司 棧  
バッヂまでブライドがある一等車 伊三男  
不夜城の様に灯がつく決算期 土鑑坊  
原色のペンキゴテ、安ホテル 十字星  
華奢な手がグラスをななく返盃し 藤四郎  
抜け道のある決算に暇が入り 九呂平

決算がこわい師走の出納簿 光 堂  
車窓から派手なペンキで基地と知り 久仁男  
キエツこやる手つき酒豪の名に恥ぢ 茂 美  
コップ酒口から先に持つて来る 柳 慶  
病院の皆寒ざむと白ペンキ 木陽子  
決算日もう一杯を呑む予算 古子郎  
人情のきづな十手が眼をつむり 良 坊  
人里を離れて十手なわをかけ 同  
着たりの背広バッヂの跡が濃く チエ子  
ペンキ屋の子も亦画家の夢を追ひ かうたる  
商店街今日もペンキの店舗が増え ポリチ  
キャバレの灯ペンキの色も招く ほんみ  
人情に負ける十手の手が鈍り 蘇 人  
バッヂ又つけかえている多趣味 半 休  
素人のペンキは厚くつきたがり 侃流洞

川 倉敷支部句会 (倉敷市)

田垣方大報

品質優良  
先カペン  
TACHIKAWA PEN  
大阪市東区豊後町四八  
立川商事株式会社  
ワビム 筆  
カワゼ 画  
カワカ 画  
タチカ 画  
タチカ 画

牛使ら腕も中人云うて去に 歌  
 お目出度い課長芝居に引つかり 広志  
 文化都市先手先手で税を上げ 呑帳  
 フアツションショーの様に鶴歩き 用人  
 鶴亀で祝った筈に先立たれ 峰  
 牛のやつ使い手までもう見抜き 晴生  
 ライバルに先手打たれたあわてよう 泥魚  
 牛の鼻ねぢて待つとる交叉点 飴ン坊  
 折鶴を嬉しい話へ乗せて折り 狂風  
 この辺はおうちであつた交叉点 実穂  
 清潔に繕う服を恥とせず 平  
 交叉点急ぎの用へ赤と出る 可笑  
 里帰りも我が家にもある遠慮 天風  
 掃溜の鶴へ噂の種つききず 素身郎  
 乳牛へ生活を委すわらを切り 流風  
 おくろぎなされと羽織ぬがされる 耕水  
 団体に交つて恥をかき捨てる まり子  
 替玉と知らず受話器に甘えられ 清子  
 金策に行けば先手を打たれたり 風の子  
 遠足が二つに切れる交叉点 麗水  
 又金がいるよ目出度い便りを見 千代春  
 替玉へいと鄭重な口をきき 龜庵  
 子は牛で父ちゃん豚の靴を履き 不二郎  
 記者どこで聞いたかボリの先手打ち 十九一  
 後輩が先手を取つた課長椅子 越鳥  
 八等身が何だと鶴は云いたそう 一善  
 押売りに牛が小屋から顔を出し 一念  
 月も見えぬ赤子に折り鶴吊つてやり 卯月  
 交叉点老母の足に気が疲れ 五茶  
 政治家の字引に恥はないそらな 大方大

川 出雲支部句会 (出雲市)

尼 緑之助報

今日からは榮転という靴の艶 白菊  
 工匠の磨きがかかる底光り 代仕男  
 全勝をめざす力士の皮膚の艶 つとむ  
 あらまあと一本の白髪に伸らよき みゆき  
 神様が結ぶ大社の石を踏み 重信  
 神だけが知つてる法廷席に立ち 季明  
 清貧は神に遠慮のない暮し 壮  
 艶のない顔で故国の土を踏み やすを  
 成人になつて世間が広すぎる 南風  
 骨董屋艶見なさいと腰をあげ ひろし  
 二十年頼る息子の肩を見る 緑之助  
 成人式人生観を少し変え 清風  
 熱のない証 抛大臣鼻で聞き 万古人  
 神プラス努力を説いて上機嫌 岬月

川 京都支部句会 (京都市)

田中島雀報

補助券をためてスクータ取るつもり 龜一  
 民生の補助に手かげんある話 九角  
 もう残る人わずかなり写真帳 親生  
 一人ツ子取り残される恐さに居 司郎  
 今テープにつなげられている丈の距離 秀徒  
 兄ちゃんのお箸が狙う玉子焼 輝雄  
 口に割る箸へちら／＼雪となる 烏雀  
 祝膳今年是最痴を云うまいぞ 極堂  
 あざやかな鯛の鱗に祝の灯 紫蘭  
 落付を見せる自信は技師の業 光二郎  
 自信満々飛車を捨て角を捨て ゆきら  
 自信の芽を摘みとる親の声こなる 礫

川 備前支部句会 (岡山県)

浜田久米雄報

持ち逃げがもうバトカーに追われてい 三六  
 真相を知るまで記者は食い下り 浄美

女記者少しはいける口を持ち 伊久野  
 まだ少しあるのに徳利持つて逃げ 白李  
 会社でも二号宅でも吊し上げ 三晃  
 持ち逃げのある日はガード下に住み 東岸子  
 ノイローゼ自己診断がまた変り 柳風子  
 ノイローゼ淋しい過去があまり余り 久米雄  
 持ち逃げの主も三面よんで居り 幸仙  
 恩師から着いた手紙が訓示めき 彌寿子  
 記者のカンもう旅先で待つている 綾女  
 持ち逃げの道へこぼれたのが続き 娛句楽  
 古日記帳ぐ前日そつと焼き 与詩雄

川 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼報

餅つきをあしらう母の白髪ふえ 良子  
 借金を苦にせずついた餅うまし 偶信  
 床を出て子等のよりくる二日目 眺成  
 加配米入れて餅つく新世帯 拳坊  
 白魚の妻の手に鏡餅が出来 枝葉  
 村中へ響け吾が家が餅を搗く 左文字  
 買つきの力のないのが釜をたき 無聖  
 お餅つき達者な母が有難し ひか平  
 餅つきのリズム座敷の子が喃し 無鬼  
 男の子あればと思う餅をつき 洋牛  
 餅つきの火番へ廻る父の年 白猫児  
 泣いてばかり居て保官てこずせ ひろ子  
 用件へ係りでないとそつぱむき 小菊  
 口どめの分け前くれた世話係 一夫  
 係ではないでしようが前置きし 不知火  
 係しか知らぬが多い大会社 柳常  
 横鎗を入れて係を背負わされ 文平  
 一通り言わせて係りが違います 英断  
 官庁の係違つた無愛想 越山

川 米子支部句会 (米子市)

三鴨美笑報

幸福な妻で初夢も見ず眠り 愚球  
 初夢を宿直室でみて勤め なぎさ  
 布袋腹抱え社長はそりかえり 詩郎  
 栄進の課長となつて腹が出来 信坊  
 腹芸があつて急場が円くすみ 節枝  
 腹立ちをじつと押える松の内 素生  
 初夢を見たい見たい夜が明ける 康江  
 ネクタイは妻が見込んで地味にしめ 定男  
 体格に似た筆えらび寄書きし 凍死路  
 故郷の親父は筆で叱りつけ 天邪鬼  
 初夢が金を拾つたところで切れ 美笑  
 初夢も見ず酔い続けた三ヶ日 一机  
 羽根つきが筆に追われて逃げており 俊郎  
 筆の跡君の性格読んでみる 風車  
 目録に祝う門出の筆をとり 庄太  
 先ず腹を満し酒豪の前に座し 水鏡  
 ジャズ党も筆で書きたい年賀状 君枝  
 妻君の選んだネクタイ女給ほめ 飄太  
 ネクタイもいらぬ服で職に生き 雄々  
 腹帯に母となる日をかぞえて見 無閑  
 ベンキ屋の筆なで廻しなで廻し 新雪

頭より顔で買われた係長 秀静  
 適任と言われ係りを又続け 丸志  
 運勢は大吉なのにこの不運 吉野  
 停年が近く運勢くつて見る 一風  
 気にすなと云われ運勢気にかり 喜天  
 吉と出た運勢恋に拍車かけ 左文字  
 さばかれる気持算木に目を落し 齊花  
 食べ後の大勢過ぎるお餅つき 実世  
 停年に近くおなさけ係長 愉多可

初夢の一寸不満な設計図 尙子  
 筆がよいなどと自惚れ負けもせず 禿童  
 久々の筆履歴書を書いてみる 陽登子  
 にくらしい妻の初夢二号を見 菅泉  
 追羽根の汗の類え筆でぬり 美喜江  
 初夢をそつと包んだ絹布団 白堂  
 ばらばらに見た初夢がまともならず 三善  
 新品の筆が半紙に難をつけのぼる 素瓢  
 背に腹の言訳はせぬ男なり 紅帆  
 ヒロインの生死作者の筆まかせ

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

野村味平報

籾運の弱い妻にも引かせて見 久雄  
 当つたと思わず母の背を叩き 酔羊  
 一わたり賞品見ながら籾を引き 魯木  
 文士劇巨匠端役で見栄を切り 昌男  
 学芸会物を云わずにすむ端役 恒雄  
 パン食て端役のせりふ習つて 武富  
 六十でまだ僕と云う父であり 素百々  
 食う事に心配はなし猫眠る 恒雄  
 魚みな売れて鉢巻首へ下げ 同  
 八等身自己陶醉の眉を引き 同  
 奥さんの悩みへ秘書の美しさ 光郎  
 預つた子のお年玉一寸借ると 光郎  
 屠蘇機嫌おんなじ礼をくり返し 光郎  
 名作と云われは、あと云うだけ 桃園  
 流してはならぬ名作利子が切れ 味平

雑川 岡山支部句会 (岡山市)

土井雷山報

苦勞して逢えば黙った差向い 麦太郎  
 十代の恋カルピスで差向い 雷山  
 談判に勝つて勘定払わされ 三六

談判に來た支関が大きすぎ 美笛  
 談判はやつぱりボスの方が勝ち 葵邸  
 記者心理デマと分ればデマを追い 喜久次  
 栄転の笑顔を記者に求められ 抱月  
 満たされぬこも幾夜か記者の妻 苦楽  
 何かある気配を記者はカンで読み 東岸子  
 さゝやきの中の大事を聞きもし 銀子  
 啞として生れて恋もさゝやけず 秋月  
 年甲斐もさゝやきへ耳を立て 雅童  
 さゝやきがもう閉会にせよといふ 吟平  
 さゝやいたつもりの声が大きすぎ 哲郎  
 愛のさゝやき生つばをのむ 久米雄  
 行末はなにも知らない母の顔 緑雪  
 首巻をはずさずみくじ引き直し 伊山  
 首巻を二人で巻いて恋の道 陽子  
 もうキツきさせぬシヨール口へ巻き 飴ん坊  
 首巻をとる真似をして御挨拶 流風  
 ぶ男に首巻だけが巻きついて 利坊  
 両側の客にさゝやき中座する 白水  
 さゝやきへ犬は敵のように吠え 青二  
 病弱に医者さゝやき気にかゝり 香谷  
 婦人記者むすなごころ押し切れず 麗水  
 新大臣記者会見へ媚を見せ 紅風  
 一本を下戸が二人で冷ましてい 九坡  
 一本へあつたえ向きの雨となり 一翠  
 先生がいらしたと子供一本氣 承平  
 一本の傘で三人ぬれて来る 竹生  
 ドラの音テープ一本つづいてい 仁齋  
 指一本出して初荷はさばかれる 聖々子  
 一本の注射へ余命託すなり 操  
 もう一本もう一本で乗りおくれ 喜楽  
 バトロンが変わつたらしい銀狐 はじめ  
 首巻さへ且那の首が短かすぎ 柳風子

雑川 木次支部句会 (島根県)

藤井明朗報

立売りのみかんも土産で帰る 十宝  
 みかん売みかん一つを口に入れ 緋文字  
 みかん売男を上げる海が荒れ 綾美  
 みかん山大中小に分けて売り 雞声  
 三ヶ日部屋一ぱいに子沢山 清夢  
 三ヶ日だけで日記が忘れられ 詩朗  
 故郷から嫁を貰えと写真が来 明朗

雑川 高知支部句会 (高知市)

大西迷窓報

会いたさは十円落して電話する とし子  
 夫にはへソクリ落したと云えず 徳三文  
 駈落ちのコースは姉の智恵もかり 梅林  
 ネクタイの好の個性うかどわれ 久平  
 どんぐりと知つて話を又つづけ 耕生  
 もう落ちるタオルへ二階呼び出され そよ子  
 ネクタイを新妻に委せた手のやりば 康之助  
 ネクタイも妻が好みのじみな柄 寛  
 ライバルへ今日もネクタイ派手に換え 俊一郎  
 慎重に打つても釘が外へ出る 舟帆  
 いゝ便りポストの軽い音で落ち 佐智子  
 後手にドアを締めてから涙 俊江  
 灰皿の外へ思案の灰が落ち 竹比呂  
 ポツツリと落ちて夜道を急がせる 一周坊  
 お師匠の撥が中途で又とまり 玲羊  
 見学の方が精しい社の事情 正己  
 将棋同好会々々長散髪屋 み舟  
 ネクタイは妻が見ればシヨール見る 己  
 口上の舞台未熟を引立てる 蘇水  
 もう落ちる夕日へ又湧くスタルジャ 迷窓

雑川 松江支部句会 (松江市)

勝谷山川報

日本は割勘で防衛力が出来 孤呂二  
 割勘でハイヤーを呼ぶ俄雨 冬生  
 ボディビルのあんな力野良(欲し) 天痴人  
 戦犯を還す力が国にない ふる児  
 早春の金魚なまずに似て動き 山川児  
 猿廻しだけを残してバスは去り 巻雨  
 猿に似て出世しそふな子が生れ 幸二  
 結び目も嬉し嫁く人貰う人 祥月  
 初荷出し男結びがはねている 与根一

みをつくし川柳会 (大阪市)

戸田古方報

あれしきの事のお札に恐縮し 花香  
 アドバルン大入御札宙に浮き 繁雄  
 最後まで読んで解つた御札状 久子  
 出発へ会いたい人は視野のそと 夢人  
 よい度胸死らぬらむつゆ知らず 同  
 ポーナスの予算はずれて寝正月 恭世  
 寝正月追加予算をせがまれる のぼる  
 借金重さを抱いた寝正月 文武洞  
 商魂もぐつたりとして寝正月 のぼる  
 老境の気安さにいる寝正月 凡九郎  
 雑煮箸嫁の名前が一つふえ せつ子  
 総入函餅を食うにも氣をつかい とし坊  
 ビルの裏夜勤が餅を焼く匂い 葉光  
 餅食えば里の両親思い出し 建美  
 年賀状僕の分はないらしい 斗牛

南海電鉄川柳会 (大阪市)

友淵貴山報

作文に車掌の親切だった事 貴山  
 運転手の居眠り車掌氣を使い 圭水

Handwritten notes and signatures in the bottom left corner, including the name '友淵貴山' and other illegible characters.

名物を開かれて車掌ちどもり 雄声  
車掌今監督乗った声になり 好郎  
終電車車掌は起す役も買い 狂二  
母親と似たのへ車掌道をあげ 路郎

### 帝化川柳会 (大阪市)

佐野白水報  
売れ残り本人よりも親なげき 繁三

新靴をかゝえ喜ぶ子の笑顔 安岡  
ストープへ掃除婦かびの餅をのせ 春潮  
新しい年がくるく餅の音 華泉  
下つ端が一等とつた隠し芸 登志晴  
成人の日は父並の酒肴 九州男  
きく丈は下つ端の意見きいてくれ 好祐  
買立の手袋がない二日酔 白水  
幸福を願う交渉人まかせ 辰始

成長期雑煮だけでは気に入らず 甲子朗  
一村を背負う交渉紋袴 一朗  
買たての足袋が見送る満員車 葉乙女  
子の丈を見上げて裾のしつけ取り 与呂志  
納得のゆく値へ半日ねばり込み 一平  
大阪の肴になつて味が落ち 雅堂  
見る丈けの肴でとそをすゝめられ 京一楼

### 阪東ベルト川柳会 (神戸市)

飯尾寄与史報  
路地裏の餅つき警邏へ道をあげ 比加留  
借金をして還暦の餅をつき 歩歩  
お餅つき家風に合わせた餅とつき 多呂坊  
お留多とり餅のやけたも存じなし いなか  
春近し餅つき見えるバスの中 村雨  
餅まきのありがたそうなた士がつき 寄与史

## 柳界展望

給「ロボット」の三題▼3・

八日佳晶居で開催された「富柳会

に、同市役所も染抜き会旗新調寄

き臥床、近來快調の由。▼川端

3・3・川柳会(堺市)は三月三

(富田林市)句会は二月四日午後

贈す力の入れ方。柳界の為めお

柳風氏は旧冬十二月上京、目下東

日午後五時半から島野工業株式会

一時同市役所日本間で開催。▼川

欣び申し上げる▼菊川泰平 栗氏

京都渋谷区幡ヶ谷本町一の一十一

社会議室で開催▼川雑撰支部句会

雑倉敷支部句会(倉敷市)は一

(門司市)は、句稿、柳誌を満洲

市)は目下第八回春の県下川柳大

(堺市)は二月十七日午後六時半

月十五日夜、水島慈愛幼稚園で

に残され惜しまれて「運の

会を、道後公会堂で開催するので

から摩太郎居で開催▼川雑玉造支

開催寒風を衝いて集まるもの二十

雨ころりと玉にして落し」とあき

柳友達と準備中とのこと▼大神

部からほり川柳会(大阪市)は七

八名▼川雑弓削支部(岡山県)二

秋氏(天理市)からのたよりに依

去、五日善竜寺で告別式執行。

日第一、十九日第二、何れも夕七時

月句会は四日午後六時から久米南

とのこと柳界の為め慶賀にたえな

去、五日善竜寺で告別式執行。

より白柳子居にて二月句会開催

町夜場会議室で開催▼三井造船川

い、「税のしるべ」七周年記念川

去、五日善竜寺で告別式執行。

▼大阪市交通局川柳会は二月十五

夜、三友倶楽部で開催▼川雑備前

柳大会は二月十九日正午から博多

去、五日善竜寺で告別式執行。

日午後五時から同院サンルームで

支部(岡山県)一月句会は十四日

柳田神社境内柳田会館で開催▼前

去、五日善竜寺で告別式執行。

開催▼みをつくし川柳会(大阪

午後六時から与詩雄居で開催▼岡

田伍健氏(松山市)は、本誌二月

去、五日善竜寺で告別式執行。

市)二月十四日午後六時から天王

山電報局新春句会は一月十五日午

号段乃女史、梨里嬢の親娘対談授

去、五日善竜寺で告別式執行。

寺小学校で開催。三月句会は十三

後五時から同局で開催▼並木会

入の写真を眺め感無量、若

去、五日善竜寺で告別式執行。

日夜同校で開催される。▼川雑松

(笠岡市)の川柳藏は二月六日の

き日の野球拳時代を追憶、

去、五日善竜寺で告別式執行。

江支部新春句会は、十六日夜勝谷

夜の二時半にあわてて散会した由

昔時を偲ぶのとたよりに寄

去、五日善竜寺で告別式執行。

山川児居で開催▼川雑米子支部松

▼岸和田市川柳会は、二月十一日

四日の節分NHKの依頼に

去、五日善竜寺で告別式執行。

露川柳会は一月十五日午後五時節

午後六時から同市蛸地蔵駅前丸二

より「老人の節分回顧」を

去、五日善竜寺で告別式執行。

枝居で新年句会開催▼川雑岡山支

食堂で開催▼阿部竜太郎氏(富田

林市)会長の富柳会は二月四日午

去、五日善竜寺で告別式執行。

部新春句会、一月十五日午後六

後一時から同市役所日本間で開

大会を開催、大阪は三月廿

去、五日善竜寺で告別式執行。

時から日赤岡山支部楼上で開催。

後一時から同市役所日本間で開

大会を開催、大阪は三月廿

去、五日善竜寺で告別式執行。

当夜、土井雷山氏の支部長就任授

備、市長、助役、収入役を始め教

下交渉中の由▼延原句沙龍

去、五日善竜寺で告別式執行。

抄があり、乾杯して盛会裡に散会

育長、医師、画家、俳人も多数参

加作句し、入選句は短冊へ揮毫市

去、五日善竜寺で告別式執行。

▼川雑下関支部句会、一月十五日

午後六時因鉄職員会館で初句会開

役所各室に掲げる川柳熱の旺盛さ

去、五日善竜寺で告別式執行。

催。▼岡崎川柳研究社句会、二月

午後六時因鉄職員会館で初句会開



# 公・私・雑・記

★ウンと春めて来たが奈良の水取りがすまねば、暖かくはならな  
いだろう。★前号から紙質がよく  
なった。畳替えしたような明るさ  
である。これで素晴らしい句を寄  
せてさえもらえば申分がないと思  
う。シツカリ頼む。★志賀直哉氏  
が「世界」の三月号の一文の中で  
「批評家なんて作品に寄生する無  
用の長物だ」と書いたので文壇に  
波紋を起しているが、柳壇には批  
評家らしい批評家はいないよう  
だ。川柳の批評では飯が食えない  
かも知れないが、飯が食えないか  
らこそ却って真摯な批評が出来る  
とも云えよう。しかし一方では生  
活と遊離しているだけに、無理解  
な批評、遊戯的な批評、堂派的な  
批評、至って視野の狭い批評、放  
言的な批評が行われる惧れがない  
とは云えない。私は作品に対する  
批評はあつていいと思つている。  
イヤ無ければならないと思つて  
いるが、従来行われた断片的な批  
評はあまりにも感情的で面白くな  
い原因となるので、お互に避けて  
来たのである。批評家は相当の識  
見を持たねばならない。批評に当  
つては親切でなければならぬ

い。公平でなければならぬ。違  
つた物指をあてて批評をしては  
ならない。その批評によって批評  
される人たちにとつても後人にと  
つても裨益するところがなくては  
ならないと私は思つている。★古  
句研究家が別個の活動を続けてい  
るように、川柳批評家も、古今に  
わたつて資料的の蒐集や作家の  
持ち味や思想の動きなどに就い  
て常に研究をして貰いたいものだ  
である。新進作家の擡頭についても  
敏感さを持つて推奨する必  
要がある。思いつき批評  
などをされたりしては作家  
はフンガイす  
るであらう  
し、そんな批  
評こそ無用の  
長物である  
う。何れにし  
ても異色のあ  
る作家、天才作家が出ないでは批  
評家もウンザリするであらう。努  
力々々。★一月廿二日の午後、川  
柳婦人友の会の集りが本社で催さ  
れた。集つた会員は大阪を中心  
に、堺市、岸和田市などの人たち  
だつた。一部の人たちを除いては  
初めての顔合せだつたが、なか  
く賑やかだつた。年令的に云え  
ば明治、大正、昭和生れの人たち  
で随分と巾のある集りであるが川  
柳のつながりが、年令的な壁を突

き破つて和やかに朗らかに終始出  
来たことはユカイだつた。四月に  
は篠山の会員を迎えられて観桜句  
会をやる相談もして貰つた。今後の  
発展を祈つてゐる。★本社の例会  
は原則として第二土曜日に催され  
て来たが、三月から毎月七日を定例  
日とすることに改正した。記憶に  
も便利だし、これだと曜日が一定  
しなくなるので土曜日だと差支え  
る作家にも出て貰へるので句会  
部と相談の結果改正することにし

### 近鉄特急

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…  
座席指定・ノンストップ

大阪	名古屋	伊勢
2時間48分	2時間	1時間40分
大阪	宇治山田	宇治山田
1時間40分	1時間40分	1時間40分

大阪上六発	名古屋発	宇治山田発
7.40 15.40	8.00 16.00	8.47 16.47
8.40 17.40	9.00 18.00	9.47 18.47
11.40 19.40	12.00 20.00	12.47 20.47
13.40	14.00	14.47

本社 大阪市天王寺区上本町6

なつているので、なか／＼の大事  
業である。しかし、今年是非共  
これを完成して机上を飾りたいと  
思つている。既に故人になつた名  
作家の中から十人ぐらひはこの句  
集の末尾に加えたいと思つてい  
る。その人たちの句を蒐集するの  
も一仕事である。この企画以後  
に入会された方も参加の資格があ  
るので、不朽洞会の理事長あてに  
申込まれたらいいだろう。(路)

## 社の黒板

▼川雑淀川支部では武部香林氏が  
いささか健康を害され支部長を辞  
任されたので、二月一日から、木  
村水堂氏が衆望を担つて支部長に  
就任することとなり、支部を東淀  
川区十八条町八七番地同氏宅へ移  
した。▼川雑弓削支部では二月一  
日から福島鉄児氏の後を襲つて直  
原七面山氏が支部長に就任、支部  
を岡山県久米南町下弓削四五番  
地同氏方へ移した。この際、従来  
併用していた弓削川柳会の名を廃  
した。

Printed in Japan

### 募 集

課題吟莫集

帯 ニューズ (介句以内) 増田 耕民選  
浜田久米雄選  
(三月二十日締切)

麦 酒 (介句以内) 富田 半休選  
松中下草 (介句以内) 国弘 半休選  
(四月二十日締切)

### 毎号募集

近作柳樽 龍崎村句以内 麻生路郎選  
川柳塔(雑 詠) 北川春真選  
文章(評論・研究・感想其他) 西選  
(毎月二十日締切)

### 投稿規定

▲投句は各種必ず別紙に認め、住  
所氏名雅号を明記する事。  
▲「近作柳樽」は一般作家の雑吟  
を募る。  
▲「課題吟」は誰でも投句が出来  
る。  
▲「川柳塔」への投句は不朽洞会  
員に限る。

### 川柳雑誌

B列5号 毎月一回一日発行  
第三号

定価 五〇円 (送料四円)

半ヶ年 三二四円  
一ヶ年 六〇〇円

昭和三十一年二月廿五日印刷  
昭和三十一年三月一日発行

### 川柳雑誌社

発行所 川柳雑誌社

大阪市住吉区西成区西五丁目二五番地  
印刷所 麻生幸二郎  
大阪市住吉区西成区西五丁目二五番地

電話 住吉 六〇八一  
御寄附 大阪 七五〇五〇

大曲駒村

### 小児科 平尾 醫院

大阪市南区日本橋筋二ノ七〇  
電話 戎 一六四三番

# THE SENRYU ZASSHI

NO. 346

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

**高血圧**  
を  
忘れよう!  
**サーピナ錠**



1日1~2錠で高血圧の苦しみを忘れるサーピナ錠! 成分含量も多くてお得です

山之内

眼のないはなし



パパもママも ホーライ党  
大阪料理  
**蓬菜**  
大阪 なんば

心暖まる土地で 冬を楽しく

**南**の国へ小旅行

新和歌浦

淡路島 加太  
難波から2時間40分  
「なると号」難波発 8.10 13.15 18.10  
錦溪温泉  
天見温泉

**南海電車**